玉葉　道かはるみゆきかなしきこよひかな、限のたびと見るにつけても。

續古　○かたぐ〜にはかなかるべきこの世かな、有を思ふも、なきを忍ぶも。

ことゝなくけふ暮にけり、あすも又かはらずこそは、ひますぐるかげ。

○世中のうきもうからず思ひとけば、あさぢにむすぶ露の白玉。

鳥べ野を心のうちにわけ行ば、いそぢの露に袖ぞそぼつる。

新古　年月をいかで我身におくりけん、きのふの人もけふはなき世に。

ちりたる櫻にならびてさきそめし花を。

ちるとみて又さく花の匂ひにも、おくれさきだつ、ためし有けり。

曉無常を。

つきはてんその入あひの程なきを、このあかつきにおもひしりぬる。

きりぐ〜すの枕近〻なき侍しに。

そのをりのよもぎかもとの枕にも、かくこそ蟲の音にはむつれめ。

月前無常を。

月をみていづれの年の秋までか、この世中にたのみあるらん。

哀とも心におもふ程ばかり、いはれぬべくばいひこそはせめ。

世中を夢と見る〜、はかなくもなほおどろかぬは我心哉。

櫻花ちり〜になる木のもとに、名殘ををしむ鶯のこゑ。

きえにける本のしづくをおもふにも、たれかは末の霧のみならぬ。

新古　○つの國の難波の春は夢なれや、蘆のかれはに風わたるなり。

大炊御門右大臣大將と申侍しをり、德大寺の左大臣うせ給ひたりし服のうちに、母はかなくなり給ひぬと聞て、高野よりとぶらひ奉とて。

玉葉　かさねきる藤の衣をたよりにて、心の色をそめよとぞおもふ。

親かくれて、又契たりける人はかなくなりて、歎ける程に、むすめにさへおくれたりける人に。

このたびはさきに見えけん夢よりも、さめずや物はかなしかるらん。

はかなくなりて年へにける人の文どもを、物の中よりもとめ出て、むすめ

に侍ける人のもとへ遣すとて。

涙をやしのばん人はながすべき、哀に見ゆる水ぐきの跡。

鳥邊野にてとかくわざし侍し煙の中より、月を見て、

○とりべ野や鷲の高ねのすそならん、煙を分て出る月かげ。

相空入道大原にてかくれ侍たりしを、いつしかとひ侍らずとて、寂然申おくりたりしに。

とへかしな、別の袖に露ふかきよもぎがもとの心ほそさを。

返し。

よそにおもふ別ならねば、誰をかはみよりほかにはとふべかりける。

同行に侍し上人をはりよくてかくれぬと聞て、申遣したりし。

寂然

みだれずとをはり聞こそうれしけれ、さても別はなぐさまねども。

返し。

東山高蓋寺の山形靈鷲山に似てゐる、故に山名とした。人それを略して鷲山鷲峰といつた。

相空入道は前にいつた三寂の長兄。皇太后宮大進藤原爲業が剃髪後の名。

『同行に侍し上人』とは西行が家人の一人、源次兵衛が遁世して西住といつた男のこと。西住の死は西行が五十六歳の間である。西行は仁安二年冬四國九州に行脚してゐる。その後二三年の出來事であらう。後の想像する人がある。兎に角西住に關する記事が少いのである。明瞭で寂然集や山家集にのみである。

この世にて又あふまじきかなしさに、すすめし人ぞ心みだれし。

跡のことどもひろひて、高野にまゐりてかへりたりしに、又寂然。

いるさにはひろふ形見も殘りけり、歸る山路の友は涙か。

返し。

いかにともおもひわかでぞ過にける、夢に山路を行々心地して。

ゆかりなりし人はかなく成て、とかくのわざしに鳥べ山へまかりて、歸侍しに。

かぎりなくかなしかりけり、とりべ山、なきを送てかへる心は。

紀伊局みまかりて、諸の人々各々歌よみ侍しに。

おくり置てかへりし野べの朝露を、袖にうつすは涙なりけり。

玉葉

ふなをかのすそののつかの數そひて、昔の人に君をなしつる。

後の世をとへと契しことのはや、わすらるまじきかたみなるらん。

鳥羽院の御さうそうの夜、高野よりくだりあひて。

同

集に出てゐる四首の歌と詞書に依つてその一端を知るのみである。

新千載

とはばやと思ひよりてぞなげかまし、昔ながらの我みなりせば。

待賢門院かくれさせ給ひたりける御跡に、人々又のとしの御はてまで候けるに、しりたりける人のもとへ、春花のさかりにつかはしける。

たづぬとも、風のつてにもきかじかし、花とちりにし君が行へは。

返し。

ふく風の行へしらする物ならば、花とちるともおくれざらまし。

近衛院の御はかに人々ぐしてまゐり侍りたりけるに、露いとふかかりければ。

玉葉

みがかれし玉のうてなを、露ふかき、野べにうつして見るぞかなしき。

前伊賀守爲業ときはに堂供養しけるに、したしき人々まうでくると聞て、云遣しける。

いにしへにかはらぬ君が姿こそ、けふはときはのかたみなりけれ。

返し。

爲業は前にいつた相空入道のことで世にあつた時代の名である。『ときは』は即ち常盤にて、その父爲忠の第のあつた所である。常盤は並岡の西にある。

色かへで獨殘れる常盤木は、いつをまつとか人のみるらん。

德大寺の左大臣の堂に立入て見侍けるに、あらぬことになりて、哀なり。三條太政大臣歌よみてもてなし給ひしこと、ただいまとおぼえて、しのばるゝ心地し侍り。堂のあとあらためられたりける、さることのありとみえて、哀なりければ。

○なき人のかたみにたてし寺に入て、跡ありけりと見て歸りぬる。

『』の間、内閣本に脱す。

『三昧堂のかたへわけ參けるに、秋の草ふかかりけり。鈴蟲の音かすかにきこえければ、あはれにて。

○おもひおきしあさぢが露をわけ入ば、ただわづかなるすずむしのこゑ。

古郷の心を。

○野べに成てしげきあさぢをわけ入ば、君が住ける石ずゑの跡。

寂然大原にてしたしき者におくれてなげき侍けるに、つかはしける。

露ふかき野邊になり行古郷は、おもひやるだに袖しほれけり。

德大寺左大臣は實能のこと、西行の舊主人である。

寂然は壹岐守賴業の僧名である。即ち三寂の眞中の人。

序文參照。

遁世ののち、山家にてよみ侍ける。

○山里は庭の木ずゑのおとまでも、世をすさみたるけしきなる哉。

伊勢より、こがひ(小貝)をひろひて、箱に入て、つつみこめて、皇太后宮大夫のつぼねへつかはすとて、かき付侍ける。

○浦嶋がこは何ものと人とはば、あけてかひあるはことこたへよ。

八嶋内府が松浦にむかへられて、京へ又おくられ給ひけり。武士の、母のことはさることにて、右衞門督のことをおもふにぞとて、なき給ひけると聞て。

○夜の鶴の都のうちを出であれな、このおもひにはまどはざらまし。

福原へ都うつりありときこえし頃、伊勢にて月の歌よみ侍しに。

○雲のうへやふるき都に成にけり、すむらん月の影はかはらで。

月前懷舊。

いにしへを何に付てか思ひ出ん、月さへかはる世ならましかば。

遇友忍昔といふこころを。

今よりは昔がたりは心せん、あやしきまでに袖しほれけり。

ふるさとのこころを。

○露しげくあさぢしげれる野に成て、ありし都は見し心地せぬ。

新古　○これや見し昔すみけん跡ならん、よもきが露に月のやどれる。

○月すみし宿も昔の宿ならで、我みもあらぬ我身なりけり。

出家後よみ侍ける。

新古　身のうきを思ひしらでややみなまし、そむくならひのなきよなりせば。

世中をそむきはてぬといひおかん、思ひ知べき人はなくとも。

旅のこころを。

續後撰　程ふればおなじ都の中だにも、おぼつかなさはとはまほしきを。

○旅ねする嶺の嵐につたひきて、哀なりけるかねのおと哉。

すてて出(いにし)しうき世に月のすまであれな、さらば心のとまらざらまし。

天王寺にまゐりて、雨のふりて、江口と申所にて、宿をかり侍しに、かさざりければ。

新古　世ノ中をいとふまでこそかたからめ、かりの宿をもをしむ君哉。

返し。

同　世をいとふ人とし聞ゞば、かりの宿に心とむなと思ふばかりぞ。

遊女たへ

かく申てやどしたりけり。

千載　伊勢にて、菩提山上人對月述懷し侍しに。

もろともにながめ〳〵て秋の月、ひとりにならんことぞかなしき。

○めぐりあはで雲のよそにはなりぬとも、月に成行むつび忘るな。

西住上人れいならぬこと大事に煩侍けるに、とぶらひに人々まうできて、又かやうに行あはん事もかたしなど申て、月あかゝりける折哀に、述懷を。

世のがれて、都を立はなれける人の、ある宮ばらへたてまつりけるに、かはりて。

撰集抄第九卷『江口遊女成尼事』の一章と參照。

玉葉　くやしきは、よしなく人になれそめて、いとふ都のしのばれぬべき。

大原にて、良遷法師の、まだすみがまもならはねばと申けむ跡、人々見けるに、ぐして罷て、よみ侍ける。

大原やまだすみ釜もならはずと、いひけん人を今あらせばや。

奈良の僧、とがのことによりて、あまた陸奥國へつかはされしに、中尊寺と申所にまかりあひて、都の物語すれば、涙ながす、いと哀なり。かかることはかたきことなり、命あらば物がたりにもせんと申て、遠國述懷と申ことをよみ侍しに。

○涙をば衣川にぞながしつる、ふるきみやこをおもひ出つつ。

年來あひしりたる人の、陸奥國へまかるとて、とほき國の別と申ことを、よみ侍しに。

中將實方は清少納言と親交のあつた人。陸奥守となつてその地で沒した。金葉詞華千載の歌人頭である。他に彼方藏人がある。實方の死後遺骸はなほ雀とともに死んだ、上皇と語りつつ殿上人は興ふかいことである。

新古　君いなば月まつとてもながめやらん、東のかたの夕暮の空。

みちの國にまかりたりしに、野中につねよりもとおぼしきつかのみえ侍しを、人にとひ侍しかば、中將のみはかとは是なりと、申侍しかば、中將とは誰がことぞと、とひ侍しかば、實方の御ことなりと申す、いと哀におほゆ。さらぬだに物がなしく、霜がれのすすきほのぐ見えわたりて、後にかたらんこと葉なき心地して。

新古　くちもせぬその名ばかりをとどめおきて、かれののすすきかたみにぞみる。

讃岐にまうでて、松山の津と申所に、新院のおはしましけむ御跡を尋侍しに、かたちもなかりしかば。

松山の浪にながれてこし船の、やがてむなしく成にける哉。

しろみね（白峯）と申所の御はかにまゐりて。

よしや君、昔の玉のぬかとても、かからん後は何にかはせん。

善通寺の山に住侍しに、庵の前なりし松をみて。

玉葉　ひさにへて、我が後の世をとへよ松、跡忍ぶべき人もなきみぞ。

土佐のかたへやまからましと、思ひ立こと侍しに。

ここを又我すみかへてうかれなば、松やひとりにならんとすらん。

大峰の笙ノ窟にて、もらぬいはやもと、平等院僧正よみ給ひけむこと、思ひいだされて。

露もらぬ窟も袖はぬれけりと、きかずばいかにあやしからまし。

深山紅葉を。

○名におひて紅葉の色のふかき山を、心にそむる秋も有哉。

ささと申宿にて。

庵さす草のまくらにともなひて、ささの露にもやどる月哉。

月を。

ふかき山に住ける月を見ざりせば、思ひでもなき我みならまし。

月すめる谷にぞ雲はしづみける、嶺吹はらふ風にしかれて。

戚に主從の關係であつたことが崇德上皇と西行とを親しく結びつけた。』

をばが峰と申所の見わたされて、月ことに見侍しかば。

をばすてはしなのならねど、いづくにも月すむ峰の名にこそ有けれ。

つるちと申宿にて、月を見侍しに、梢の露のたもとにかかり侍しを。

梢もる月もあはれを思ふべし、光にぐして露もこぼるる。

夏、熊野へ參侍しに、いはたと申所にすずみて、下向し侍る人につけて、京へ西住上人の許へ遣しける。

玉葉　松がねのいはたの川の夕すずみ、君があれなとおもほゆる哉。

はりまのしよしやへ參るとて、野中のし水見侍しこと、一昔になりて後、修行すとて、とほり侍しに、おなじさまみなかはらざりしかば。

續後撰　昔見し野中の清水かはらねば、我影をもや思ひ出らん。

ながらをすぎ侍しに。

○つの國のながらの橋のかたもなし、名はとどまりて聞えわたれど。

みちの國へ修行しまはりしに、白河の關にとどまりて、月つねよりもくまなかりしに、能因が秋風ぞ吹と申けむをり、いつなりけんとおもひ出られて、關屋の柱に書付たりし。

白川のせきやを月のもる影は、人の心をとむる成けり。

心ざすことありて、安藝の一ノ宮へ參侍しに、たかとみの浦と申所にて、風に吹とめられて程へ侍しに、とまより月のもりこしを見て。

新古　浪の音を心にかけてあかす哉、とまもる月の影を友にて。

旅にまかるとて。

新古　月のみやうはの空なるかたみにて、思ひも出ば心かよはん。

○見しままに姿も影もかはらねば、月ぞ都のかたみなりける。

新古　都にて月を哀と思ひしは、數にもあらぬすまひ成けり。

遠〻修行しけるに、人々まうできて餞しけるに、よみ侍ける。

○たのめおかむ、君も心やなぐさむと、かへらんことはいつとなけれど。

あづまのかたへ、あひしりたり人のもとへまかりけるに、さやの中山見し

能因が秋風云々は一部をば霞ともしかどとも秋風にいでぬ白河の關ゝ風の歌をいふ。著聞集ではこの歌を引用して、歌人居ながらに名所を知るると罵倒してゐるが、この歌が出來たが前か後か知らないが、能因も奥州の地は踏んでゐる。

選集抄第八卷『侍従大納言成通鞠事』参照。京都中の御門通四洞院に小社二座あり。鞠の神様といつて、成道の書跡である。

ことの、昔になりたりける、思出られて。

新古　○年たけて又こゆべしと思ひきや、命なりけり、さやの中山。

下野、武蔵のさかひ川に、舟わたりをしけるに、霧ふかかりければ。

○霧ふかきけふのわたりのわたし守、岸の船つき思ひさだめよ。

秋とほく修行し侍けるに、道より侍従の大納言成通の許へ申おくり侍ける。

続拾　嵐吹く嶺の木の葉にさそはれて（なひて）、いづちうかるる心なるらん。

返し。

なにとなくおつる木のはも吹風に、ちり行かたはしられやはせぬ。

とほく修行し侍けるに、菩提院の前に、齋宮にて、人々別の歌つかうまつりけるに。

さりともとなほあふことを憑む哉、しでの山路をこえぬ別は。

後の世の事思ひ知たる人のもとへ遣しける。

世ノ中に心有明の人はみな、かくてやみにはまよはねものを（まよはねものを）はざらなん。

返し。

世をそむく心ばかりは、有明のつきせぬやみは君にはるけん。

行基菩薩の、何處にか一身をかくさんと、かき給ひたること、思出られて。

新古　○いかがせん（いかがすべき）、世にあらばやは、世をもすてて、あなうの世やとさらにおもはん。

内にかひあはせあるべしと、きこえ侍しに、人にかはりて。

かひありな、君がみ袖におほはれて、心にあはぬこともなき哉（こともなき世は）。

風吹ば、花さくなみのおるたびに、櫻がひあるみしまえのうら（三島江浦）。

浪あらふ衣のうらの袖がひを、みぎはに風のたたみおく哉。

宮ノ法印高野にこもらせ給ひて、ことの外にあれてさむかりし夜、こそでた（小袖）

まはせたりし、又の朝にたてまつり侍し。

こよひこそあはれみあつき心ちして、嵐の音はよそに聞つれ。

阿闍梨兼賢（堅）世のがれて、高野に籠て、あからさまに仁和寺へいでて、僧綱

に成て、まゐらざりしかば、申つかはし侍し。

賀茂齋院退下後紫野の齋院の前を通ると、折から人が門内に入つたので、後から追つて内へ入つたと。宣旨の前書である。宣旨の局は宣旨を取扱つた女房をいふのであるが、後にはその事がなくても上臈の女房をいふので、有栖川は齋院の側を流れる川。

袈裟の色やわかむらさきにそめてける、こけの袂を思ひかへして。

齋院おりさせ給ひて、本院のまへすぎ侍しをりしも、人のうちへいりしにつきて、ゆかしう侍しかば、[みまはりて、おはしましけん、折は、]（内閣本によりて補ふ）かからざりけんかしとか、はりてけることがら、あはれにおぼえて、宣旨のつぼねのもとへ申おくり侍し。

君すまぬ御うちはあれて、ありすがは（有栖川）、いむすがたをもうつしつる哉。

返し。

おもひきや、いみこし人のつてにして、なれし御うちをきかん物とは。

ゆかりなりし人、新院の御かしこまりなりしを、ゆるし給ふべきよし、申入たりし御返事に。

もがみ川（最上）つなでひくらんいな舟の、しばしが程はいかりおろさん。

御返事たてまつり侍し。

つよくひくつなでと見せよ、もがみ川、その稲舟のいかりおろさめ（錨）。

巣鶴上皇が讃岐へ還御させられた前御室の仁和寺に御出になり、髪を剃つて野心なき實證されて居つた。

中院の右大臣は源雅定のこと。

かう申たりしかば、ゆるし侍てき。

世ゝ中みだれて、新院あらぬさまにならせおはしまして、御ぐしおろして、仁和寺の北院におはしますと聞て、參たりしに、兼賢阿闍梨の出あひたりしに、月のあかくて、何となく心もさわぎ、哀に覺て。

かかる世に影もかはらずすむ月を、見る我（身）みさへうらめしき哉。

素覺がもとにて、俊寂と罷合て、述懐し侍しに。

なにごとにとまる心のありければ、さらにしも又世のいとはしき。

秋のすゑに、寂然高野に參て、暮の秋、思ひをのぶといふことをよみ侍し。

なれきにし都もうとなりはてて、かなしさそふる秋の山里（暮かな）。

中院の右大臣、出家おもひたつよしかたり給ひしに、月あかく哀にて、明ゞ侍にしかば、かへり侍き。そののち、ありしよの名殘おほかるよし、いひ送り給ひて。

夜もすがら月をながめて、契ゝ置しそのむつごとにやみはれにき（し）。

堀川は、『長からん心も知らず黒髪の亂れて今朝は物をこそ思へ』の作者である。

返　し。

すむと見し心の月しあらはれば、このよのやみははれざらめやは。

待賢門院の堀川ノ局、世のがれて、西山にすまると聞て、尋まかりたれば、すみあらしたるさまにて、人のかげもせざりしかば、あたりの人にかくと申おきたりしを、聞ていひおくられたりし。

しほなれしとまやもあれて、うき浪によるかたもなきあまとしらずや。

返　し。

とまの屋に浪立よらぬけしきにて、あまり住うき程は見えにき。

同院の中納言ノ局、世のがれて、小倉山のふもとにすまれし、ことがらいふに哀なり。風のけしきさへことにおぼえて、書付侍し。

山おろす嵐のおとのはげしさは、いつならひけん君がすみかぞ。

同院ノ兵衛ノ局、かのをぐら山のすみかへまかりけるに、この歌をみてかき付られける。

法金剛院……山城名勝志云、在二竝岡南太秦東一、舊記云、境内方四町、舊圖境内有二金目地藏堂一、今院外東南二町許有之云々。同云、號二五位山法金剛院一、天安寺一、元是清原夏野山莊也、宮ヲ寺號二竝岡寺一、又天安年中稱二天安寺一、其後久廢待賢門院再二興之一、名改二法金剛院一云云。

浮世をば嵐のかぜにさそはれて、家をいでにしすみかとぞみる。

主なく成たりし泉をつたへゐたりし人のもとにまかりたりしに、對泉懷舊といふことをよみ侍しに。

すむ人の心くまるゝ泉かな、昔をいかに思ひいづらん。

十月ばかりに法金剛院の紅葉見侍しに、上西門院おはしますよし聞て、侍賢門院の御こと思出られて、兵衛ノ局のもとにさしおかせ侍し。

紅葉見て君が袂や時雨ゐらん、昔の秋の風をしたひて。

返　し。

色ふかき木ずゑをみても時雨つつ、ふりにしことをかけぬまぞなき。

高倉のたき殿のいしども、閑院へうつされて、跡なくなりたりと聞て、見にまかりて、赤染がいまだにかかりとよみけんをり、おもひ出られて。

今だにもかかりといひしたきつせの、その折までは昔なりけん。

周防の内侍、我さへのきのと書付られしあとにて、人々述懷し侍しに。

五條三位は俊成卿のこと。平家物語の忠度歌をつくつて持つて來りたりし條に五條享極とある。俊成を呼んで五條三位といつた。

いにしへはつかひしあともある物を、何をかけふのかたみにはせん。

爲業朝臣、常盤にて、古郷述懐といふことをよみ侍しに、まかりあひて。

新古　しげき野をいく一むらに分なして、さらに昔をしのびかへさん。

雪ふりつもりしに。

玉葉　なかく〜に濱のほそ道うづめ雪、ありとて人のかよふべきかは。

折しもあれ、うれしく雪のつもる哉、かきこもりなんともおもふ山路に。

花まゐらせしをしきに、あられのふりかゝりしを。

しきみおくあかのをしきのふちなくば、なにに霰の玉とならまし。

五條三位歌あつめけると聞て、歌つかはすとて。

續拾　花ならぬことの葉なれど、おのづから色もやあると君ひろはなん。

三位返し。

續拾　世をすてて入にし道のことのはぞ、哀もふかき色は見えける。

昔、申なれたりし人の世のがれて後、伏見にすみ侍しを、尋てまかりて、

庭の草ふかかりしを分入て侍しに、虫のこゑあはれにて。

玉葉　分て入る袖にあはれをかけよとて、露けき庭に虫さへぞなく。

覺雅僧都の六條房にて、心ざしふかきことによせて、花の歌よみ侍けるに。

○花ををしむ心の色の匂ひをば、子を思ふおやの袖にかさねん。

堀河の局のもとより、いひつかはされたりし。

この世にてかたらひおかん、郭公、しでの山路のしるべともなれ。

返し。

郭公鳴々こそはかたらはめ、しでの山路に君しかくらば。

仁和寺の宮、山崎の紫金臺寺に籠ゐさせ給ひたりし頃、道心年をおひてふかしと云ことをよませ給ひしに。

あさく出し心の水や湛ふらん、すみゆくままにふかくなる哉。

曉、佛を念ずといふことを。

夢さむる鐘のひゞきに打そへて、十たびのみなをとなへつる哉。

世のがれて、伊勢の方へまかるとてすずか山にて。

新古　すずか山、（うき世をよそに）うき世ノ中をふりすてて、いかになり行く我身なるらん。

中納言家成なぎさの院したてて、程なくこぼたれぬと聞て、天王寺より下向しけるついでに、西住、淨蓮など申ス上人どもして見けるに、いとあはれにて、各々述懐しけるに。

○折につけて人の心もかはりつつ、世にあるかひもなぎさなりけり。

撫子のませに、うりのつるのはひかかりたりけるに、ちひさきうりどものなりたりけるをみて、人の歌よめと申せば。

○撫子のませにぞはへるあこたうり、おなじつらなるなをしたひつつ。

五月會に、熊野へまゐりて、下向しけるに、日高に、宿にかつみを菖蒲にふきたりけるをみて。

○かつみふくくまのまうでのとまりをば、こもくろめとやいふべかるらん。

新院百首和歌めしけるに、たてまつるとて、右大將見せにつかはしたりけるを、返しつかはすとて。

家の風吹つたへたるかひありて、あることの葉のめづらしき哉。

祝　を。

○千代ふべき物をさながらあつめてや、君がよはひの數にとるべき。

わか葉さすひらの（平野）の松は、さらに又えだ（枝）にや千代の數をそふらん。

君が代のためしになにを思はまし、かはらぬまつ（松）の色なかりせば。

述懐の心を。（或本老後述懐に有）

なにごとにつけてか世をばいとふべき、うかりし人ぞけふ（今）はうれしき。

よしさらば涙の池に袖なして、心のまままに月をやどさん。

くやしくもしづのふせや（ふせを）の戸をしめて、月のもるをもしらで過ぬる。

○とだえせでいつまで人のかよひけん、嵐ぞわたる、谷のかけはし。

○人しらでつひのすみかに憑べき、山のおくにもとまりそめぬる。

うきふしをまづおもひしる涙かな、さのみこそはとなぐさむれども。

芭蕉の『嵯峨日記』のなかに、『さびしさなくはうからましと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし』云々とある。

とふ人もおもひたえたる山郷のさびしさなくばすみうからまし。

○ときはなる太山（ミヤマ）にふかく入にしを、花咲なばとおもひける哉。

詞花　○世をすつる人はまことにすつるかは、すてぬ人こそすつるなりけれ。

時雨かは、山めぐりする心かな、いつまでとなく（のゝ）打しほれつゝ。

千載　○浮世とて月すまずなることもあらば、いかがはすべき、天の下人。

千載　○來ん世には心のうちにあらはさん、あかでやみぬる（止）月のひかりを。

新古　○ふけにける我世の影を思ふまに、はるかに月のかたぶきにける。

同　しをりせで（栞）、なほ山ふかく分入らん、うきことときかぬ所ありやと。

千載　曉の嵐にたぐふ鐘の音を、心のそこにこたへてぞきく。

○あらはさぬ我心をぞうらむべき、月やはうとき、をばすての山。

○たのもしな（内ナシ）、君々にますを（折）りにあひて、心の色を筆にそめつる。

今よりはいとはじ、命あればこそ、かかるすまひの哀をもしれ。

身のうさのかくれがにせん、山里は心ありてぞ住べかりける。

千載　いづくにかみをかくさまし、いとひ（ても）出て浮世にふかき山なかりせば。

新古　○山里にうき世いとはん人もがな、くやしく過（スギ）し昔かたらん。

足引の山のあなたに君すまば、入とも月ををしまざらまし。

○浮世（内ナシ）いとふ山のおくにもしたひ來て、月ぞ住家の哀をもしる。

朝日まつ（まず）程（内イ）はやみにやまよはまし、有明の月の影なかりせば。

古郷は見し世にもにずあせにけり、いづち昔の人（行にけん 挑内）は行けん。

新古　○昔見し宿の小松に年ふりて、嵐の音を梢にぞ聞。

山郷は谷のかけ樋のたえ〳〵に、水こひどりのこゑ聞ゆなり。

新古　ふるはたの（古畑）そばのたつ木（たつきにをる）鳩にゐるはとの友よぶこゑのすごき夕暮。

○見ればけに心もそれに（そゞろに内）なりぞ行、かれの（枯野）の薄、有明の月。

新古　なさけありし昔のみなほしのばれて（偲）、ながらへまうき世にも有哉。

○世を出て溪に住けるうれしさは、ふるす（古巣）に殘る鶯のこゑ。

○あばれ行しばのふたては（ホノマ）山里に心すむべきすまひなりけり。

新古　○いづくにもすまれずばただすまであらん、柴の庵のしばしなる世に。

同　○いつなけきいつおもふべきことなれば、のちの世しらで人のすぐらん。

○さてもこはいかがすべき、世ノ中に有にもあらず、なきにしもなし。

花ちらで月はくもらぬ世なりせば、物を思はぬ我身ならまし。

たのもしな、よひあかつきの鐘の音に、物おもふつみはぐしてつくらん。

なにとなくせりと聞こそあはれなれ、つみけん人の心しられて。

はら〳〵とおつる涙も哀なり、たまらず物のかなしかるべし。

わび人の涙ににたる櫻哉、風みにしめばまづこぼれつつ。

玉葉　つく〴〵と物をおもふに打そへて、をり哀なる鐘のおと哉。

谷の戸に獨ぞ松もたてりける、我のみ友はなきかと思へば。

同　松風のおとあはれなる山里に、さびしさそふる日ぐらしのこゑ。

みくまののはまゆふおふる浦さびて、人なみ〳〵に年ぞかさなる。

○いそのかみふるきをしたふ世なりせば、あれたる宿に人すみなまし。

新古　風吹ばあだにやれ行ばせうばの、あればとみをもたのむべきかは。

またれつる入あひの鐘の音すなり、あすもやあらばきかんとすらん。

入日さす山のあなたはしらねども、心をかねておくりおきつる。

しばの庵はすみうきこともあらましを、友なふ月の影なかりせば。

わづらはで月には夜もかよひけり、となりへつたふあせのほそ道。

ひかりをばくもらぬ月ぞみがきける、いなばにかへるあさひこのため。

影きえては山の月はもりもこず、谷は木末の雪と見えつつ。

嵐こす嶺の木の間を分きつつ、谷の清水にやどる月かげ。

月を見るよそもさこそはいとふらめ、雲ただここの空にただよへ。

雲にただこよひは月をやどしてん、いとふとてしも晴ぬものゆゑ。

○打はなるる雲なかりけり、吉野山、花もてわたる風とみたれば。

なにとなく汲たびにすむ心かな、岩井の水に影うつしつつ。

谷風は戸を吹あけて入物を、なにと嵐のまどたたくらん。

つがはねどうつれる影を友として、をしすみけりな、山川の水。

おとはせで岩にたばしる霰こそ、よもぎが宿の友となりけれ。

○熊のすむこけの岩山おそろしや、むべなりけりな、人もかよはぬ。

里人のおほぬさこぬさたてなめて、むまかたむすぶ野べになりけり。

くれなゐの色なりながら、たでのほのかよしや、人のめにもたてねば。

ひさ木おひてすずめとなれるかげなれや、波たつ岸に風わたりつつ。

おりかくるなみの立かと見ゆるかな、すさきにきゐるさぎの村鳥。

浦ちかみかれたる松の梢には、波の音をや風はかくらん。

しほ風にいせの濱荻ふけばまづ、ほずゑを浪のあらたむる哉。

ふもと行舟人いかにさむからん、てま山だけをおろす嵐に。

おぼつかな、いぶきおろしのかざさきに、あさづま舟はあひやしぬらん。

いたちもるあまみがせきに成にけり、えぞがちしまを煙こめたり。

もののふのならすすさみはおびただし、あけそのしさり、かもの入くび。

私の誌論中にかういふ言葉があるが、我々日本人も悲しい自然の諧調を感じて抵抗されない運命の祕密を握つた瞬間には、熱情的に西利の答へをもつてゐる。何事のばしの西行を見よ。彼のうたは、上乗の歌を讀むのは、実の利を求めるものである。彼は事実に反抗し、西行の制動の誘惑に抗して、西行の情的性にまふまに動いてゐる。

新古　○山里は人こさせじとおもはねど、とはるることぞうとくなり行。

補内　太神宮御祭日よめるとあり。

同　何事のおはしますをばしらねども、かたじけなさのなみだこぼるる。

同　かさはあり、其みはいかに成ぬらん、あはれなりける人の行末。

同　さらばまたそりはしわたす心地して、おふさかかれるかづらきの山。

此集、周嗣禪師不慮被レ相二傳西行上人一自筆一處、於二法勝寺僧房一燒失間、尋二他書一書二寫之一料帋躰被レ擬二彼舊本一數奇至、動二感緒一者也。

けぶりだに跡なきうらのもしほ草、又かきおくをあはれとぞみる。　頓阿

此西行上人集、蔡花園上人、此本卷始和歌十一、銘奥書歌副二一首一、新所レ被レ灑二翰墨一也。雖レ未レ消二遺恨之心灰一聊擬二殘芳之手澤一而已。

觀應貳年辛卯七月日　修行者周嗣判

追加西行和歌

次第不同

しづかならんとおもひ侍ける頃、花見に人々まうで來りければ。

玉葉　花見にとむつつ人のくるのみぞ、あたら櫻のとがには有ける。

題不知

同　山ふかみ霞こめたる柴の戸(庵)に、友なふ物は谷の鶯。

伊勢太神宮にて。

新古　○宮ばしらしたつ岩ねにしきたてて、露もくもらぬ日の御影哉。

神路山にて。

同　○神路山、月さやかなるかひありて、天下をばてらすなりけり。

さか木ばに心をかけて(ん)ゆふしでの(太神四手)、おもへば神も佛なりけり。

二見の浦にて月のさやかなりけるに。

○おもひきや、ふた見のうらの月をみて、明暮袖に浪かけんとは。

みもすそ(御裳濯)川のほとりにて。

○岩戸あけしあまつみことのそのかみに、櫻を誰か殖始(ウエメ)けん。

內宮のかたはらなる山陰に、庵むすびて侍ける頃。

○爰も又都のたつみ鹿ぞすむ、山こそかはれ、名は宇治の里。

風の宮にて。

この春は花ををしまでよそならん、心を風の宮にまかせて。

月よみのみやにて。

○梢みれば秋にかはらぬ名なりけり、花おもしろき月よみの宮。

櫻の御まへにちりつもり、風にたはるるを。

續古　○神風に心やすくぞまかせつる、櫻の宮の花のさかりを。

○かみ路山、みしめ(御標)にこむる花ざかり、こはいかばりうれしからまし。

春の歌の中に。

續後撰　かすまずば何をか春とおもはまし、まだ雪きえぬみよしのの山。

伊勢の月よみの社に參て、月をみてよめる。

新古　○さやかなる鶯のたかねの雲井より、影やはらぐる月よみの森。

壽量品。

續拾　○鶯の山、くもる心のなかりせば、誰も見るべき有明の月。

題不知。

同　年をへてまつもをしむも、山櫻、花に心をつくすなりけり。

續後撰　なにごとをいかにおもふとなけれども、袂かわかぬ秋の夕暮。

玉葉　秋ふかみよわるは虫のこゑのみか、聞我とてもたのみやはある。

同　秋の夜をひとりやなきてあかさまし、友なふ虫のこゑなかりせば。

新古　おぼつかな、秋はいかなるゆゑのあれば、すずろにもののかなしかるらん。

同　○松にはふまさきのかづらちりぬなり、外山の秋は風すさむらん。

同　○秋しのや外山のさとや時雨らん、いこまのたけに雲のかかれる。

續後撰　あづまやのあまりにもふる時雨哉、誰かはしらぬ、無神月とは。

新古　○道のべの清水ながるる柳影、しばしとてこそ立とまりつれ。

同　○よられつる野もせのくさの影ろひて、涼しくくもる夕立の空。

月照寒草。

玉葉　花におく露にやどりし影よりも、かれのの月はあはれなりけり。

山家冬月。

同　冬がれのすさまじげなる山里に、月のすむこそ哀なりけれ。

高野山をすみうかれてのち、伊勢國二見浦の山寺に侍りけるに、太神宮の御山をば神ぢ山と申、大日の垂跡をおもひて、よみ侍りける。

千載　○ふかく入て神路のおくを尋れば、又うへもなき峰のまつかぜ。

寂然大原に住けるに、高野より、山ふかみといふことを上におきて、十首歌よみてつかはしける中に。

玉葉　山ふかみなるゝかせぎのけぢかさに、世にとほざかる程ぞしられる。

神佛を一つに見て、生をこの土に受くるを喜ぶ。

人のもとより、いとどしくうきにつけてもたのむかな、ちぎりし道のしるべたがふなと、申おこせて侍ける、返事に。

同　たのむらんしるべもいさや、ひとつ世の別にだにもまどふ心は。

世をそむきて後、修行し侍けるに、海路にて、月をみてよめる。

千載　わたの原はるかに浪をへだてきて、都に出し月をみる哉。

さがみの國とがみがはら（相模国 高上原）にて。

○しかまづのくずのしげみにつまこめて、とがみ河原にをじか鳴也。

みののくにに（美濃国）にて。

○郭公、都へゆかばことづてん、こえくらしたる山の哀を。

立そめてかへる心は、錦木のちづか（千束）待べき心ちこそせね（すれ）。

旅の歌中に

玉葉　風あらき柴の庵は、つねよりもねざめて物（そ）はかなしかりけり（ける）。

なけくこと侍ける人を、とはざりければ、あやしみて、人にたづぬと聞て、申遣しけり（る）。

同　なべて見る君が歎（なさけを）をとふ歎に、おもひなされぬ言のはも哉。

人におくれてなげきける人に遣しける。

新古　○なき跡の面影をのみみ（身）にそへて、さこそは人の戀しかるらめ。

紀伊二位身まかりてけるあとにて。

玉葉　ながれ行〃水に玉なすうたかたの、あはれあだなるこの世なりけり。

續後拾　なき人もあるをおもふも、世（に）ノ中は、ねぶりのうちの夢とこそなれ（しれ）。（みれ）續後拾

鳥羽院に出家のいとま申とてよめる。

玉葉　○をしむとてをしまれぬべきこの世かは、みをすててこそみをもたすけめ。

前大納言成通世をそむきぬとききて、遣しける。

同　○いとふべきかりのやどりはいでぬなり、今はまことの道を尋（ネ）よ。

前大僧正慈鎮無動寺に住侍（ミ）けるに申遣しける。

續後撰　○いとどいかに山を出でじとおもふらん、心の月を獨すまして。

院の二位即ち紀伊二位は、後白河天皇の乳母。少納言信西の後妻。嘗て待賢門院の女房であつた。

この歌などは西行が出家遁世の意獨た説明するであらう。

返し。

同　○うきみこそなほ山陰にしづめども、心にうかぶ月をみせばや。

小侍從やまひおもくなりて月ごろへにけると聞て、とぶらひにまかりたりけるにこのほどすこしよろし。

もきかせぬ和琴のてひきなし侍けるを聞て。

玉葉　ことのねになみだをそへてながす哉、たえなましかばとおもふあはれに。

月〻歌〻中に。

○かくれなくもにすむ蟲のみゆれども、我からくもる秋のよの月。

したはるる心やゆくと、山のはにしばしな入そ、秋のよの月。

戀〻歌〻中に。

玉葉　あま雲のわりなきひまをもる月の、影ばかりだにあひみてし哉。

同　○うらみてもなぐさみてまし、中〻につらくて人のあはぬと思はば。

同　今よりはあはで物をばおもふとも、後うき人にみをばまかせじ。

新古　○はるかなる岩のはざまにひとりゐて、人目つつまで物思はばや。

同　面影のわすらるまじき別かな、名殘を人の月にとゞめて。

同　○有明はおもひであれや、よこ雲の、ただよはれつるしののめの空。

續後撰　から衣立はなれにしままならば、かさねて物はおもはざらまし。

同　○我袖をたごのすそにくらべばや、いづれかいたくぬれはまさると。

新古　○人はこで風のけしきのふけぬるに、哀に雁のおとづれて行。

同　○たのめぬに君くやとまつよひのまは、ふけゆかでただ明なまし物を。

あはれとて人の心の情あれや、數ならぬにはよらぬなけきを。

同　物おもひてながむるころの月の色に、いかばかりなる哀そふらん。

みさほなる涙なりせば、から衣かけても人にしられざらまし。

遠く修行し侍けるに、きさかたと申所にて。

○まつしまやをしまの磯も何ならず、ただきさがたの秋のよの月。

題不知

芭蕉は『奥の細道』のなかに『俤松島』にかふひて又異な

り。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し」といつてゐる。

○月の色に心をふかくそめましや、都を出ぬ我身なりせば。
○風さむみいせの濱荻分ゆけば、衣かりがね浪に鳴なり。
○月影のしらら(白貝)のはま(蛤)のしろか(白貝)ひは、なみもひとつに見えわたる哉。
○月影のしらら(白貝)のはま(蛤)のしろか(白貝)ひは、なみもひとつに見えわたる哉。
内裏貝合　しほ(しほさゐ)煙ますほのを(小貝)がひひろふとて、いろ(色)の濱とは云にやあるらん。
同　浪よする竹のとまりのすずめ(雀)貝、うれしき世々にあ(に)ひにける哉。
なみよする吹上の濱のすだれ(簾)がひ(貝)、風もぞおろす、いそ(磯)にひろはば。(ん)
はじめおろかにして、するにまさる戀と云事を。
○我戀はほそ谷川の水なれや、するにくはは(はる)る音聞ゆ也。
見我人不知戀を。
○よご(余古)の海の君をみしま(三嶋)にひくあみの、めにもかからぬめぢの村鳥。
○我戀はみしまが浦にこぎ出て、なごろわづらふあまのつり舟。
○なご(奈見)の海かれたるあさの島がくれ、風にかたよるすかの村鳥。
○とりそむる氷をいかにいとふらん、あぢむらわたるすは(諏訪)の水うみ。

波にちる(ちる)紅葉の色をあらふゆゑに、錦の島といふにやあるらん。
新古　○山ふかくさこそ心はかよふとも、すまで哀は知らん物かは。
同　○數ならぬみをも心のもち(もり)がほ(新古)にうかれても又歸りきにけり。
同　○おろかなる心のひくにまかせても、さてさはいかに、つひの住かは、
同　○うけがたき人のすがたにうかび出て、こりずや誰も又しづむらん。
○世をいとふ名をだにもさはとどめおきて、數ならぬみの思出にせん。
としの暮に、人につかはしける。
同　おのづからいはぬをもとふ(とた)人やあると、やすらふ程に年ぞ(の)暮ぬる。
寂蓮、人々すすめて、百首歌よませ侍けるに、いなび侍て、熊野にまうでける道に、夢に、なに事もおとろへゆけど、此みちこそ、世のするにかはらぬ物はあれ、なほこの歌よむべきよし、別當湛快三位俊成に申と見侍りて、おどろきながら、此歌をいそぎよみ出して、つかはしけるおくに、かき付侍ける。

同　○するの世もこの情のみかはらずと、見し夢なくばよそに聞ましし。

待賢門院堀河のもとよりよび侍けるに、まかるべきよし申ながら、まからで、月のあかかりける夜、そのかどをとほり侍に、にしへゆくしるべとおもふ月影の、空だのめこそかひなかりけれと、申侍ける返事。

新古　たち入らで雲まを分し月影は、またぬけしきや空に見えけん。

春たつこころを。

年くれぬ、春くべしとはおもはねど、まさしくみえてかなふはつ夢。

六花　とけそむるはつ若水の氷にて、春たつことのまづくまれぬる。

同　磯なつむあまのさをとめ心せよ、おきふく風に浪たかくみゆ。

同　○山櫻かざしの花に折そへて、かぎりの春のいへづとにせん。

をりならぬめぐりのかきの卯花を、うれしく雪のさかせける哉。

郭公ききにとてしもこもらねど、はつせの山はたより有けり。

六花　むらさきの色なき根の野べなれや、かたぎ祭にてかけぬ葵は。

同　○五月雨は野原の澤に水こえて、いづれなるらんぬまの八橋。

同　○山がつの折かけがきのひまこえて、となりにもさく夕がほの花。

同　○露つつむ池のはちすのまくりばに、衣の玉をおもひしる哉。

月照瀧水。

雲きゆるなちの高嶺に月たけて、光をぬけるたきの白糸。

熊野へまうで侍けるとて、那智のたきをみて。

○みにつもることばの罪もあらはれて、心すみけり、三重のたき。

花山院の御庵室のほとりにて。

木のもとにすみけるあとをみつる哉、なちの高根の花を尋て。

○三笠山、春はこゑにて知られけり、氷をたたく鶯のたき。

浪にやどる月を汀にゆりよせて、鏡にかくる住よしの岸。

○はつ春をくまなくてらす影をみて、月にまづしるみもすそ御裳濯の岸。

千鳥鳴繪島の浦にすむ月を、浪にうつしてみるこよひ哉。

万代　○すはの海に氷すらしも、夜もすがら、きそのあさぎぬさえわたる也。

時雨そむる花苑山に秋暮て、錦の色をあらたむる哉。

まさ木わるひものたつみや出つらん、村雨すぎぬ、かさとりの山。

谷あひのまきのすそ山石たてば、杣人いかに涼しかるらん。

青根山、苔の莚の上にして、雪はしとねの心ちこそすれ。

杣くだす伊吹が奥の川上に、たつ木うつ[ら]し、苔さなしちる。

○吹出て風はいぶきの山の端にさそひて出る闘の藤川。

雁がねはかへる道にやまよふらん、こしの中山霞へだてゝ。

穂津山丹波ニアリ　こほりわる筏の棹のたゆければ、もちやこすらん、ほつの山をば。

松上残雪。

○はこね山、梢も又や冬ならん、ふた見は松の雪の村ぎえ。

紀州　わけて行道のみならず、梢さへちくさのたけは心すみけり。

すみれさくよこの野のつ花老ぬれば、おもひ〳〵に人かよふなり。

○くらぶ山、かこふ柴やのうちまでも、心をさめぬ所やはある。

○さ夜ごろも入野の里に打ッならし、遠く聞ゆるつちの音哉。

○我物と秋のこずゑを見つる哉、小倉の山に家ゐせしより。

水の音はまくらにおつる心地して、ねざめがちなる大原の里。

○雨しのぐみのぶの郷のかき柴に、すだちはじむる鶯のこゑ。

ふし見過ぬ、岡の屋になほとどまらじ、日野まで行て駒心みん。

みなそこの奥ゆかしくぞおもほゆる、つぼのいしぶみ、みとのはま風。

からす崎の濱のこいしとおもふ哉、しろもまじらぬすがしまのくろ。

伊良湖　いらこ崎にかつをつる舟ならびうき、はるけき浪にうかれてぞ[よる]。

杣人の眞木のかり屋のあだぶしに、音する物はあられなりけり。

○となりゐぬ畑のかり屋にあかす夜は、物哀なるものにぞ有ける。

くみてこそ心すむらめ、しづのめがいただく水にやどる月かげ。

○そこすみて浪しづかなるさざれみづ、わたりやしらぬ山川のかけ。

○我もさぞ庭の眞砂の出あそび、さて老たてるみこそ有けれ。
しばしこそ人目づつみにせかれける、さては涙やなる瀧の川。

續古　誰とてもとまるべきかは、あだしの野の草のはごとにすがる白露。

新勅　おほはらやひらの高根の近ければ、雪ふる戸ぼそおもひこそやれ。

大峰修行のとき、屏風の嶽といふところにて。

びやうぶにや心をたてておもふらん、行者はかへり、鬼はとまりぬ。

蟻の戸わたりといふ所にて。

篠ふかみ霧たつ嶺を朝立て、なびきわづらふありのとわたり。

吉野にて。

○一すぢにおもひ入なん、吉野山、又あらばこそ人もさそはめ。

心せん、しづが垣根の梅の花、よしなく過る人とどめけり。

東國修行のとき、ある山寺にしばらく侍て。

○山たかみ岩ねをしむら柴の戸に、しばしもさらば世をのかればや。

○雲にまがふ花の本にてながむれば、おぼろに月はみゆるなりけり。

ゆふざれやたはらがみねをこえ行ゞば、すごくきこゆる山ばとのこゑ。

さらぬだに世のはかなさを思ふ身に、鵺鳴わたるしののめの空。

秋たつと人はつげねどしられけり、太山のすその風のけしきに。

○いかに我きよくくもらぬ身と成て、心の月の影を見るべき。

○君もとへ、我もしのばん先だたば、月を形見におもひ出つゝ。

續古　何ゆゑに今日まで物をおもはまし、命にかへて逢世なりせば。

續古　○うきをうしとおもはざるべき我身かは、何とて人の戀しかるらん。

題不知。

續千　待ことはは昔までかとおもひしに、聞ふるされぬ郭公哉。

同　法花勸持品の心を。

いかにしてうらみし袖にやどりけん、いでがたく見し有明の月。

無量壽經、易往而無人の心を。

ただ同行となるのみで誰とも分らないが、多分西住のことであらう。

同　西へ行く月をやよそにおもふらん、心にいらぬ人のためには。

四國のかた修行し侍けるに、同行の都へ歸り侍りけるが、いつかへるべきなど申ければ。

玉葉　柴の庵のしばし都へかへらじと、思はんだにも哀なるべし。

戀の歌の中に。

同　打たへて君にあふ人、いかなれや、我身もおなじ世にこそはふれ。

修行し侍けるとき、花おもしろかりける所にてよみける。

同　ながむるに花の名立のみならずば、木のもとにてや春をおくらん。

後鳥羽院、位におはしましけるとき、をり〳〵の行幸など思出られて、隱岐國へ奉りける。

○おもひ出ゞや、かた野の御狩かりくらし、かへるみなせの山のはの月。

○見ればまづなみだながるる水無瀬川、いつより月の獨すむらん。

七月十五日の夜、月あかかりけるにふなをかにまかりて。

新千載夫木集内少々　いかで我今夜の月をみにそへて、しでの山路の人をてらさん。

○浪たてる川原柳のあをみどり、涼しくわたる岸の夕風。

山郷の外面の岡のたかがきに、心がましき秋ぜみのこゑ。

○あさでほすしづがはつ木をたよりにて、まとはれてさく夕がほの花。

○しのにおるあたりも涼し、川社、榊にかくる浪のしらゆふ。

ひばりたつあら田におふる姫百合の、何につくともなき我身哉。

五月雨に小田の早苗やいかならん、あぜのうきつちあらひこされて。

重出　五月雨に山だのあぜの瀧枕、數をかさねておつるなりけり。

川わだのよどみにとまるながれ木の、うき橋わたる五月雨の頃。

同　水なしとききてふりぬるかつまだの、池あらたむる五月雨のころ。

○橋の匂ふ梢にさみだれて、山郭公こゑかほるなり。

重出　五月雨に水まさるらし、宇治橋のくもでにかかる浪の白糸。

ひろせ川、わたりのせきのみをじるし、みかさそふべし、五月雨の頃。

○ながれやらでつたの入江にまく水は、舟をぞもやふ五月雨の頃。
五月雨は行べき道のあてもなし、小篠が原も瀧にながれて。
○郭公なきわたるなる浪の上に、こゑたたみおくしがのうらかぜ。
○誰かたに心ざすらん、郭公、さかひの松のうれになくなり。
○あやめふく軒に匂へる橘に、きてこゑぐせよ、山郭公。
思ふことみあれのしめに引〻すずの、かなはずばよもならじとぞおもふ。
たつた川、岸のまがきを見わたせば、ゐせきの波にまがふ卯の花。
思ひ出て古巣に歸る鶯は、旅のねぐらやすみうかるらん
つつじ咲〻山の岩ねにゆふばえて、尾倉はよその名のみなりけり。
たれならん、あら田のくろにすみれつむ、人は心のわかななるべし。
○生かはる春のわか草待わひて、原のかれのにきぎす鳴なり。
片山に柴うつりして鳴〻雉子、たつ羽音してたかからぬかは。
梢うつ雨にしをれてちる花の、なしき心を何にたとへん。

○ときはなる花もやあると、吉野山、おくなく入てなほ尋みん。
○くれなゐの雪は昔のことと聞に、花の匂ひのみつる今日哉。
月みれば風に櫻の枝たれて、花よとつぐる心地こそすれ。
つくりおきしこけのふすまに、鶯のみにしむ花のかやうつすらん。
年ははや月なみかけてこえてけり、むべつみけらし、ゐぐのわかたち。
○あはれみし袖の露をば結かへて、霜にしみゆく冬がれのの野邊。
霜がれてもろくくだくる荻のはを、あらくわくなる風の音哉。
紅葉よりあじろのぬのの色かへて、ひをくくるとはみゆるなりけり。
○川わだにおの〳〵つくるふし柴を、ひとつにとづるあさ氷哉。
○しの原のはらやみかみのたけを見渡せば、一夜の程に雪は降けり。
たけのほる朝日の影のさまぐに、都に雪はきえみ、きえずみ。
枯はつる萱がうはばに降る雪は、さらに尾花の心ちこそすれ。
重出
うらかへすをみの衣とみゆる哉、竹の葉分にふれる白雪。

雪とくるしみみにしだく笠さぎの、道ゆきにくきあし(足)がら(柄)の山。

あはせつる(たる木)こるのはし(端)たかをきとらし、犬かひ人のこゑしきるなり。

○神人の庭火すすむるみかけには、まさきのかづら(蔓)くりかへせども。

拾遺

異本になき六家集本の歌

春

立春の朝詠みける。

山の端の霞むけしきにしるき哉、今朝よりやさは春のあけぼの。

春立つと思ひもあへぬ朝戸出に、いつしか霞む音羽山かな。

家々に春を翫ぶといふことを。

門毎にたつる小松にかざされて、宿てふやどに春は來にけり。

元日子日にて侍りけるに。

子日して立てたる松に植そへん、千代かさぬべき事のしるしに。

山里に春立つといふことを。

山里はかすみ渡れるけしきにて、空にや春の立つを知るらん。

難波わたりに年越に侍けるに、春立つ心をよみける。

いつしかも春來にけりと、津の國の難波の浦をかすみこめたり。

春になりける方たがへに、志賀の里へまかりける人に具してまかりけるに、

逢坂山のかすみたりけるを見て。

わきてけふ逢坂山の霞めるは、立ち後れたる春やこゆらん。

海邊ノ霞といふことを。

もしほやく浦のあたりは立のかで、烟あらそふ春霞かな。

子　日。

子日する人に霞はさきだちて、小松が原をたなびきにけり。

子日しに霞たなびく野べに出て、初鶯の聲を聞くかな。

若　菜。

春日野は年の中には雪つみて、春は若菜のおふるなりけり。

若菜に寄せて古きを思ふといふことを。

若菜つむ野べの霞ぞあはれなる、むかしを遠くへだつと思へば。

老人の若菜といへることを。

卯杖つき七草にこそ出にけれ、としを重ねてつめるわかなに。

鶯によせておもひを述べけるに。

うき身にて聞くも惜しきは、鶯の、かすみにむせぶ曙の聲。

雨中鶯。

鶯の春さめ〳〵と鳴き居たる、竹の雫やなみだなるらん。

住みける谷に鶯の聲せずなりにければ。

鶯は谷の古巣をいでぬとも、我がゆくへをば忘れざらなん。

鶯は我をすもりにたのみてや、谷の外へはいでて行くらん。

春の程はわがすむ庵の友になりて、ふるすないでそ、谷の鶯。

きぎすを。

春霞いづち立いでて行にけん、きぎす住む野をやきてけるかな。

梅を。

香にぞまづ心しめおく、梅の花、色はあだにも散りぬべければ。

山ざとの梅といふことを。

香をとめん人をこそ待て、山里の、垣ねのうめの散らぬかぎりは。

この春は賤が垣ほにふれわびて、梅が香とめん人したしまん。

庵の前なりける梅を見てよめける。

梅が香を山ふどころに吹ためて、入り來ん人にしめよ、春かぜ。

伊勢のにしふく山と申ところに侍りけるに、庵の梅かうばしく匂ひけるを。

柴の庵によるく梅の匂ひ來て、やさしき方もあるすまひかな。

ふるき砌の梅。

何となく軒なつかしき梅ゆゑに、すみけん人のこころをぞ知る。

山里の春雨といふことを、大原にて人々よみけるに。

この庵とあるは、伊勢二見ケ浦近く西吹山の庵のことであらう。

春雨の軒たれこむるつれ〴〵に、人に知られぬ人のすみかか。

山家よぶこどり。

山里にたれを又こはよぶこ鳥、ひとりのみこそすまんと思ふに。

苗　代。

苗代の水を霞はたなびきて、うちひの上にかくるなりけり。

霞に月のくもれるを見て。

雲なくておぼろなりとも見ゆる哉、かすみかかれる春の夜の月。

雨中柳。

なか〳〵に風のおすにぞ亂れける、雨にぬれたる青柳の絲。

水邊柳。

水底にふかみどりの色見えて、風に波よる川柳かな。

待花忘他といふことを。

待つによりちらぬこころを山櫻、咲きなば花の思ひしらなん。

この歌は芭蕉が特に『嵯峨日記』のなかに引用したものである。そして彼は『獨すむほどおもしろきなし』とつけ加へてゐる。

花を待つこころを。

おぼつかな、何れの山の嶺よりか、またるる花の吹きはじむらん。

花の歌あまたよみけるに。

野に出て何所ともなく尋ぬれば、雪とは花の見ゆるなりけり。

雪とぢし谷の古すを思ひ出て、花にむつるるうぐひすの聲。

おもひやる心や花に行かざらん、霞こめたるみよしのの山。

まがふいろに花さきぬれば吉野山、春ははれせぬ峰のしら雲。

花見ればそのいはれとはなけれども、心のうちぞ苦しかりける。

たぐひなき花をし枝に咲かすれば、櫻にならぶ木ぞなかりける。

身を分けて見ぬ梢なく盡さばや、よろづの山の花のさかりを。

櫻さく四方の山邊をかぬるまに、のどかに花を見ぬここちする。

白川の春の梢のうぐひすは、花のことばを聞くこゝちする。

何とかや世にありがたき名をえたる、花に櫻（ふカ）にまさりしもせし。

山ざくら霞の衣あつくきて、この春だにもかぜつつまなん。

おもひやる高嶺の雲の花ならば、散らぬ七日ははれじとぞ思ふ。

のどかなる心をさへに過しつつ、花ゆゑにこそ春をまちしか。

ならひありて風さそふとも山櫻、たづぬる我を待ちつけてちれ。

すそのやく烟ぞ春は、吉野山、花をへだつるかすみなりける。

今よりは花見ん人に傳へおかん、世をのがれつつ山にすまんと。

しづかならんと思ふ頃、花見に人々のまうで來ければ。

花も散り、人も來ざらんをりはまた、山の峽（カヒ）にてのどかなるべし。

春の曙、花見けるに、鶯の鳴きければ。

花のいろに聲やそむらん、うぐひすの、鳴くねことなる春の曙。

春は花を友といふ事を、清和院の齋院にて、人々よみけるに。

おのづから花なき年の春もあらば、何につけてか日を暮さまし。

屏風の畫を人々よみけるに、春の宮人むれて花見ける所に、よそなる人の

清和院は勢賀院ともいふ。清和天皇の御母藤原殿皇后明子ここに在らせられたのでこの名がある。今日の御苑石藥師の門の南。

俊忠は俊成の父。中納言俊忠のこと。

見やりて立てりけるを。

木の下は見る人しげし、さくら花、よそにながめて我はをしまん。

山寺の花さかりなりけるに、昔をおもひ出て。

よしの山ほきぢづたひに尋ね入りて、花みし春は一むかしかも。

清和院の花盛りなりける頃、俊忠がいひ送りける。

おのづから來る人あらば、もろともに眺めまほしき山櫻かな。

返し。

ながむてふ數に入るべき身なりせば、君が宿にて春はへなまし。

雨のふりけるに花の下に車をたてでながめける人に。

ぬるともと蔭を頼みて思ひけん、人の跡ふむけふにもあるかな。

落花の歌あまたよみけるに。

いかでわれこの世の外の思ひ出に、風を厭はで花をながめん。

山風の木のもとうづむ花の雪は、岩井にうくも氷とぞ見る。

よし野山、花吹きぐして嶺こゆる、嵐は雲とよそに見ゆらん。

をしめばと思ひけもなくあだに散る、花は、心ぞかしこかりける。

木の下の花に今宵はうづもれて、あかぬ梢を思ひあかさん。

雪と見て影にさくらの亂るれば、花の笠きる春のよの月。

あだに散るさこそ梢の花ならめ、すこしはのこせ春の山風。

こころえつ、只一筋に今よりは、花を惜まで風をいとはん。

よし野山、櫻にまがふ白雲の、散りなん後は晴れずもあらなん。

花と見ばさすが情をかけましを、雲とて風のはらふなるべし。

風さそふ花のゆくへは知らねども、をしむ心は身にとまりけり。

白川の花、庭面白かりけるを見て。

あだに散る梢の花をながむれば、庭にはきえぬ雪ぞつもれる。

高野にこもりたりける頃、草の庵に花のちりつみければ。

散る花の庵の上をふくならば、風入るまじくめぐりかこはん。

夢中落花といふことを、前齋院にて人々よみけるに。

春風の花を散らすと見る夢は、さめても胸のさわぐなりけり。

風の前の落花といふことを。

山ざくら枝きる風のなごりなく、花をさながらわがものにする。

花の歌十五首よみけるに。七首は異本に出づ

おぼつかな谷は櫻のいかならん、嶺にはいまだかけぬしら雲。

花ときくは誰もさこそはうれしけれ、思ひしづめぬわが心哉。

おぼつかな、春は心の花にのみ、いづれの年かうかれそめけん。

いざ今年ちれと櫻をかたらはん、なか〳〵さらば風やをしむと。

風吹くと枝を離れて落つまじく、花とぢつけよ青柳のいと。

ふく風のなどて櫻にあたるかな、かばかり人の惜むさくらを。

同じ身の珍しからずをしめばや、花もかはらず咲けばちるらん。

山おろしに亂れて花のちりけるを、岩はなれたる瀧と見たれば。

蕚。

跡たえて淺茅しげれる庭の面に、たれわけ入りて菫つみけん。

かきつばた。

沼水に茂るまこものわかれぬを、咲きへだてたる杜若かな。

山路のつつじ。

はひつたひ折らで躑躅を手にぞとる、さかしき山のとり所には。

歎　冬。

岸ちかみうゐけん人ぞうらめしき、波にをらるる山吹の花。

蛙。

みさびゐて月も宿らぬにごり江に、我すまんとて蛙鳴くなり。

伊勢にまかりたりけるに、みつと申すところにて、海邊の春の暮といふことを神主どもよみけるに。

すぐる春、潮のみつより舟出して、波の花をや先にたつらん。

三月晦日に。

けふのみと思へば長き春の日も、ほどなく暮るる心地こそすれ。

行く春をとどめかねぬる夕暮は、明ほのよりもあはれなりけり。

夏

更衣

限りあれば衣ばかりをぬぎかへて、心は花をしたふなりけり。

水邊卯花。

山川の波にまがへる卯の花を、たちかへりてや人はをるらん。

夜卯花。

まがふべき月なき頃の卯の花は、よるさへ晒す布かとぞ見る。

不尋聞子規といふことを、加茂社にて人々よみけるに。

郭公、卯づきの忌にゐこもるを、思ひ知りても來鳴くなるかな。

時鳥。

尋ぬれば聞きがたきかと、時鳥、こよひばかりはまち試みん。

ほととぎす、まつ心のみ盡させて、聲をばをしむ五月なりけり。

人にかはりて。

まつ人の心を知らば、ほととぎす、頼もしくてや夜をあかさまし。

時鳥を待ちて明けぬといふことを。

時鳥きかであけぬる夏の夜の、うらしまの子はまことなりけり。

郭公の歌五首よみけるに。（三首は異本に出づ）

大井川、をぐらの山のほととぎす、ゐせきに聲のとまらましかば。

郭公そののち越えん山路にも、かたらぬ聲はかはらざらなん。

時鳥を。

ほととぎす聞く折にこそ、夏山の青葉は花に劣らざりけり。

ほととぎす、いかばかりなる契にて、心つくさで人のきくらん。

かたらひしその夜の聲は、郭公、いかなる世にもわすれんものか。

郭公、花たちばなは匂ふとも、身をうの花のかきねわするな。

雨の中に郭公を待つといふことをよみけるに。

時鳥しのぶ卯月も過ぎにしを、なほ聲をしむ五月雨のそら。

五月の晦日に山里に、罷りて立ち歸りにけるを、時鳥もすげなくきき捨て

て歸りし事など、人の申し遣はしける返事に。

時鳥名殘あらせて歸りしが、聞き捨つるにもなりにけるかな。

題しらず。

空晴れて沼の水嵩をおとさずば、あやめもふかぬ五月なるべし。

さることありて、人の申しつかはしける返りごとに、五日。

折におひて人に我身やひかれまし、つくまの沼のあやめなりせば。

高野に中院と申す所に、あやめふきたる坊の侍りけるに、櫻の散りけるが

珍しくおぼえてよみける。

櫻散る宿にかさなるあやめをば、花あやめとやいふべかるらん。

ちる花をけふのあやめの根にかけて、藥玉ともやいふべかるらん。

五月五日、山寺へ人のけふいる物なればとてさうぶ菖蒲をつかはしたりける返

りごとに。

西にのみ心ぞかかる、あやめ草、この世ばかりのやどとおもへば。

みな人の心のうきは、あやめ草、西に思ひのひかぬなりけり。

五月雨の軒の雫に玉かけて、宿をかざれるあやめぐさかな。

五月雨。

水ただふ入江のまこも刈りかねて、むなでに捨つる五月雨の頃、

こざざしく古里をのの道のあとを、又澤になすさみだれの頃。

つくぐ〜と軒の雫をながめつつ、日をのみくらす五月雨の頃。

東屋のをがやが軒のいとみづに、玉ぬきかくる五月雨のころ。

五月雨の頃にしなればあら小田に、人にまかせぬ水ただひけり。

ある所にて、五月雨の歌十五首よみ侍りし人にかはりて。六首は異本に出づ

五月雨にほすひまなくて、藻鹽草、烟もたてぬ浦のあまびと。

五月雨はいささ小川の橋もなし、いづくともなくみをに流れて。

水無瀬川、をちのかよひぢ水みちて、舟わたりする五月雨のころ。

水無瀬川は攝津島上郡。

水わくる難波堀江のなかりせば、いかにかせまし、さみだれの頃。

舟とめしみなとの蘆間、棹たえて、心ゆきみんさみだれのころ。

水底にしかれにけりな、さみだれてみつの眞菰をかりに來れば。

五月雨のをやむ晴間のなからめや、水のかさほせ、まこも刈ぶね。

五月雨にさのの舟橋うきぬれば、乘りてぞ人はさし渡るらん。

五月雨のはれぬ日數のふるまゝに、沼の眞菰は水がくれにけり。

思はずもあなづりにくき小川かな、五月の雨に水まさりつつ。

となりの泉。

風をのみ花なき宿はまち〳〵て、泉の末をまたむすぶかな。

水邊納涼といふことを、北白川にてよみける。

水の音にあつさ忘るるまとるかな、梢の蟬のころもまぎれて。

深山水雞。

杣人の暮に宿かる心ちして、いほりをたたく水雞なりけり。

撫子。

かきわけて折れば露こそこぼれけれ、淺茅にまじる撫子の花。

雨中撫子といふことを。

露おもみそのの撫子いかならん、あらく見えつる夕立の空。

行路夏といふことを。

雲雀あがる大野のち原、夏くれば涼む木かげをねがひてぞゆく。

ともし。

ともしする火串の松もかへなくに、鹿めあはせて明かす夏の夜。

題しらず。

夏の夜は篠の小竹の節ちかみ、そよや程なく明くるなりけり。

夏のよの月見ることやなかるらん、蚊遣火たつる賤がふせやは。

泉にむかひて月を見るといふことを。

むすびあぐる泉にすめる月影は、手にもとられぬ鏡なりけり。

夏の月の歌よみけるに。

夏のよも小ささが原に霜ぞ置く、月のひかりのさえし渡れば。

山川の岩にせかれて散る波を、あられとぞ見る、夏のよの月。

池上夏月といふことを。

影さえて月しもことに澄みぬれば、夏の池にもつららるにけり。

蓮池にみてりといふことを。

おのづから月宿るべきひまもなく、池に蓮の花さきにけり。

涼風如秋。

まだきより身にしむ風のけしき哉、あき先立つるみ山べの里。

松風如秋といふことを、北白川なる所にて人々よみて、又水聲有秋といふことを重ねけるに。

松かぜのおとのみ何か石走る、水にも秋はありけるものを。

六月祓。

御祓してぬさとりながす川のせに、やがて秋めく風ぞ涼しき。

秋

ときはの里にて、初秋月といふことを、人々よみけるに。

秋たつとおもふに空もただならで、われて光を分けん三日月。

七夕。

いそぎ起きて庭の小草に露ふまん、やさしき數に人やおもふと。

暮れぬめり、けふ待つけて棚機は、うれしきにもや露こぼるらん。

天の川、けふの七日は長きよの、ためしにも引くいみもしつべし。

待ちつけて嬉しかるらん、七夕のこころの中ぞ空にしらるる。

蜘のいかきたるを見て。

ささがにの蜘手にかけて引く絲や、けふ七夕にかささぎの橋。

草花時を得たりといふことを。

いとすすきぬはれて鹿の伏す野べに、ほころびやすき蘭（フヂバカマ）かな。

霧中草花。

ほに出るみ山が裙のむらすすき、まがきにこめてかこふ秋霧。

終日、野の花を見るといふことを。

亂れ咲くのべの萩原わけくれて、露にも袖を染めてけるかな。

萩、野にみてり。

咲そはんところの野邊にあらばやは、萩より外の花よ見るべく。

萩、野の家にみてりといふことを。

わけて出る庭しもやがて野べなれば、萩の盛をわがものに見る。

草花をよみける。

茂りゆくしばの下草おはれ（ナイ）いでて、招くや誰をしたふなるらん。

古簾刈萱。

笆あれてすすきならねど、刈萱も茂き野べとはなりけるものを。

女郎花。

女郎花わけつる袖と思はゞや、おなじ露にもぬると知れゝば。

女郎花いろめく野べにふれはらふ、袂に露やこぼれかかると。

草花露重。

今朝見れば露のすがるに折れ伏して、起きもあがらぬ女郎花哉。

大かたの野べの露にはしをるれど、わが涙なき女郎花かな。

女郎花帶露といふことを。

をらぬより袖ぞぬれける、女郎花、露むすぼれてたてるけしきに。

水邊ノ女郎花といふことを。

池の面に影をさやかにうつしもて、水かがみみる女郎花かな。

女郎花、水に近しといふ事を。

女郎花いけのさ波に枝ひぢて、ものおもふ袖のぬるるがほなる。

題しらず

おしなべて木草の末の原までも、靡きて秋のあはれ見えける。

荻の風、露をはらふ。

小じかふす萩咲く野べの夕露を、しばしもためぬ荻の上かぜ。

隣の夕の荻の風。

あたりまで哀しれともいひがほに、荻の音する秋のゆふかぜ。

あきのうたよみける中に。

吹きわたる風もあはれをひとしめて、いづくも凄き秋の夕ぐれ。

野の家の秋の夜。

寝覚つつ長き夜かなといはれ野に、いく秋までも我身へぬらん。

人々秋のうた十首よみけるに。六首は異本に出づ

玉にぬく露はこぼれて、武蔵野の草の葉むすぶ秋の初風。

ほに出てしのの小薄まねく野に、たはれてたてる女郎花哉。

荻の葉を吹きすぎて行く風の音に、心みだるる秋のゆふぐれ。

わづかなる庭の小草の白露を、もとめて宿る秋の夜のつき。

月。

天の原月たけのぼる雲路をば、分けても風の吹きはらはなむ。

いかばかり嬉しからまし、秋のよの、月すむ空に雲なかりせば。

月すみてなぎたる海の面かな、雲の波さへたちもかからで。

いざよはで出るは月の嬉しくて、入る山の端はつらきなりけり。

明くるまで宵より空に雲なくて、またこそかかる月見ざりけれ。

あさぢ原、葉末の露の玉毎に、ひかりつらぬる秋の夜のつき。

秋のよの月を雪かとながむれば、露もあられのここちこそすれ。

閑かに月を待つといふことを。

月ならでさし入る影もなき儘に、くるるうれしき秋の山ざと。

海邊月。

清見がた、月すむよはのうき雲は、ふじの高嶺のけぶりなりけり。

池上ノ月といふことを。

みさびゐぬ池の面の清ければ、やどれる月もめやすかりけり。

同じ心を遍昭寺にて人々よみけるに。

やどしもつ月の光のおほさはは、いかにいづこもひろ澤のいけ。

月、池の氷に似たりといふことを。

水なくて氷りぞしたる、かつまたの、池あらたむる秋の夜の月。

名所の月といふことを。

なべてなき所の名をやをしむらん、明石は分て月のさやけき。

海邊明月。

難波がた月の光にうらさえて、波のおもてに氷をぞしく。

終夜月を見る。

誰來なん、月の光にさそはれて、とおもふによはの明けにける哉。

八月十五夜。

山の端を出るよひよりしるきかな、今夜知らする秋のよの月。

天の川、名に流れたるかひありて、こよひの月はことにすみけり。

月ノ歌あまたよみけるに。

よもぎわけてあれたる宿の月見れば、昔住みけん人ぞこひしき。

虫の音も枯れゆく野べの草の原に、哀をそへてすめる月かげ。

木の間もる有明の月をながむれば、淋しさそふる峯のまつかぜ。

いかにせん、影をば袖にやどせども、心の清めば月のくもるを。

あれわたる草の庵にもる月を、袖にうつしてながめつつ、惜むしるしや有明のそら。

月かげのかたぶく山をながめつつ、惜むしるしや有明のそら。

まことにも誰がおもはん獨見て、後に今夜の月をかたらば。

あまの原、朝日山より出ればやや、月の光のひるにまがへる。

なか〳〵に時々雲のかかるこそ、月をもてなすかざりなりけれ。

雲はるるあらしの音は松にあれや、月もみどりの色にはえつつ。

誰もみなことわりとこそさだむらめ、晝をあらそふ秋のよの月。

影さえてまことに月のあかきには、心も空にうかれてぞすむ。

くまもなき月の面にとぶかりの、影を雲かとおもひけるかな。

ながむればいなや心のくるしきに、いたくなすみそ、秋のよの月。

雲も見ゆ、風もふくればあらくなる、のどかなりつる月の光を。

もろともに影をならぶる人もあれや、月のもりくるささの庵に。

うき雲の月の面にかかれども、早くすぐるはうれしかりけり。

過やらで月近くゆくうき雲の、ただよふ見ればわびしかりけり。

いとへどもさすがに雲の打ちりて、月のあたりを離れざりけり。

雲はらふ嵐に月のみがかれて、光えてすむ秋のそらかな。

くまもなき月の光をながむれば、まづをば捨の山ぞこひしき。

かぎりなく名殘をしきは秋のよの、月にともなふ明ほののそら。

久待月といふことを。

出ながら雲にかくるる月かげを、かさねてまつや二むらの山。

雲間に月を待つといふことを。

秋の月いざよふ山の端のみかは、雲のたえまもまたれやはせぬ。

月前薄。

をしむ夜の月にならひて、有明の、入らぬを招く花すすきかな。

花すすき、月のひかりにまがはまし、ふかきますほの色にそめずば。

月前狹。

月すむと狹うゐざらん宿ならば、あはれ少き秋にやあらまし。

月照野花といふことを。

月なくばくるれば宿へかへらまし、野べには花の盛なりとも。

月前草花。

月のいろを花にかさねて、女郎花、うはもの下に露をかけたる。
よひのまの露にしをれて、女郎花、有明の月のかげにたはるる。

月前虫。

月のすむあさぢにすだく蛬、つゆのおくにや秋をしるらん。
露ながらこほさでをらん、月かげに、小萩が枝の松虫の聲。

深夜聞蚕。

わがよとや更行く月を思ふらん、聲もやすめぬきりぐすかな。

月前鹿。

たぐひなきここちこそすれ、秋のよの、月すむ嶺のさをしかの聲。

月前紅葉。

木の間もる有明の月のさやけさに、紅葉をそへて眺めつるかな。

霧、月をへだつといふことを。

立田山、月すむ嶺のかひぞなき、ふもとに霧のはれぬかぎりは。

月によせて思をのべけるに。

よの中はくもり果ぬる月なれや、さりともとみし影もまたれず。
さらぬだにうかれて物を思ふ身の、心をさそふ秋のよの月。
あながちに山にのみすむこころかな、誰かは月のいるを惜まぬ。

月、寺のほとりに明かなり。

晝と見る月にあくるを知らましや、時つく鐘のおとなかりせば。

旅へまかりけるにとまりて、

あかずのみ都にて見し影よりも、旅こそ月はあはれなりけれ。
みしままに姿も影もかはらねば、月ぞ都のかたみなりける。

旅宿の月を思ふといふことを。

月は猶よな〳〵毎にやどるべし、わがむすびおく草の庵に。

この前の歌に安藝の一の宮に詣づる由の小序あり異本に出でたれば省けり。

月前に友にあふといふことを。

嬉しきは君にあふべき契ありて、月に心のさそはれにけり。

詣でつきて月いとあかくて、哀におぼえければよみける。

もろ共に旅なる空に月も出て、すめばや影のあはれなるらん。

旅宿の月といへる心をよめる。

あはれ知る人みたらばと思ふかな、旅ねの床にやどる月かげ。

月やどるおなじうきねの波にしも、袖しぼるべき契ありけり。

船中初雁。

沖かけて八重の汐路をゆく舟は、ほのかにぞ聞く初雁のこゑ。

霧中雁。

玉章のつづきは見えて、かりがねの、聲こそ霧にけたれざりけれ。

霧上雁。

空色のこなたをうらにたつ霧の、面に雁のかくるたまづさ。

霧。

鶉なくをりにしなれば、霧こめて、あはれさびしき深草のさと。

霧、行客をへだつ。

名殘おほみむつごとつきて歸りゆく、人をば霧もたち隔てけり。

山家霧。

立こむる霧の下にもうづもれて、心はれせぬみ山べのさと。

よをこめて竹のあみどにたつ霧の、はればやがてやあけんとすらん。

鹿。

しだりさく萩の古枝に風かけて、すがひく〳〵に小鹿なくなり。

萩が枝の露ためず吹く秋かぜに、をじか鳴なり、みやぎのの原。

夜もすがら妻こひかねて鳴く鹿の、涙や野べの露となるらん。

さらぬだに秋は物のみ悲しきを、なみだ催すさをしかのこゑ。

山おろしに鹿の音たぐふ夕暮を、物悲しとはいふにやあるらん。

鹿もわぶ空のけしきもしぐるめり、悲しかれともなれる秋かな。

小倉の麓にすみ侍りけるに、鹿の鳴きけるをききて。

小鹿なく小倉の山の裾近み、ただ獨すむわが心かな。

幽居に鹿をきく。

隣ゐぬはたのかりやにあかす夜は、しかあはれなる物にぞありける。

人を尋ねて小野にまかりけるに、鹿の鳴きければ。

鹿のねを聞くにつけても、住む人の心しらるる小野のやまざと。

嵯峨二尊院の東南にある竹林中に西行庵室の跡あり。

小野は比叡山の西坂本の地名。

隔里擣衣。

さよ衣、いづこの里にうつならん、とほく聞ゆる槌のおとかな。

虫の歌よみ侍りけるに。

夕ざれや玉うごく露のこざさ生に、聲まづならすきりぐすかな。

きりぐす鳴くなる野べはよそなるを、思はぬ袖に露ぞこぼるる。

秋風のふけゆく野べの虫の音の、はしたなきまでぬるる袖かな。

虫の音をよそに思ひてあかさねば、袂も露は野べにかはらじ。

野べになく虫もや物は悲しきと、こたへましかばとひてきかまし。

秋の夜に聲も惜まずなく虫を、つゆまどろまずききあかすかな。

秋の野の尾花が袖にまねかせて、いかなる人をまつ虫のこゑ。

ひとりねの寢覺の床のさむしろに、涙もよほすきりぐすかな。

きりぐす、夜さむになるを告げがほに、枕のもとに來つつなくなり。

虫の音をよわりゆくかときくからに、心に秋の日數をぞふる。

物おもふ寢覺とぶらふきりぐす、人よりもけに露けかるらん。

故郷虫。

草ふかみ、分入りてとふ人もあれや、ふりゆくやどの鈴虫のこゑ。

雨中虫。

壁におふる小草にわぶるきりぐす、しぐるる庭の露厭ふらし。

夕の道の虫といふことを。

うちぐする人なき道の夕ざれば、聲たておくる轡虫かな。

田家秋夕

ながむれば袖にも露ぞこぼれける、外面の小田の秋の夕ぐれ。

吹きすぐる風さへことに身にぞしむ、山田の庵の秋の夕ぐれ。

京極太政大臣中納言と申しけるをり、菊を夥しきほどにしたてて、鳥羽院にまゐらせ給ひたりける、鳥羽の南殿のひがし面の坪に、所なき程にうゑさせ給ひけり。公重少將人々をすすめて菊もてなさせけるに、くははるべきよしあれば。

君がすむやどのつぼには菊ぞかざる、仙の宮（ヒジリ）といふべかるらん。

菊。

いく秋に我あひぬらん、長月のここぬかにつむ八重のしら菊。

秋ふかみ、ならぶ花なき菊なれば、所を霜のおけとこそおもへ。

月前菊。

仙の宮とは仙洞御所をいふ。

ませなくば何をしるしに思はまし、月もまかよふ白菊の花。

嵯峨に住みける頃、となりの坊に申すべきことありて罷りけるに、道もなく葎しげりければ。

立ちよりて隣とふべき垣にそひて、ひまなくはへる八重葎かな。

題知らず。

いつよりか紅葉の色は染むべきと、時雨にくもる空にとはばや。

紅葉未遍といふことを。

いとか山、しぐれに色を染めさせて、かつ〳〵織れる錦なりけり。

あきの末に松虫のなくを聞きて。

さらぬだに聲よわりにし松虫の、秋の末にはききもわかれず。

限りあれば枯れゆく野べはいかがせん、虫の音殘せ、秋の山ざと。

紅葉色深といふことを。

限りあればいかがは色もまさるべきを、あかず時雨るる小倉山かな。

もみぢ葉の散らで時雨の日數へば、いかばかりなる色かあらまし。

霧中紅葉。

錦はるあきの梢を見せぬかな、隔つる霧のやどをつくりて。

賤しかりける家に、蔦の紅葉の面白かりけるを見て。

思はずよ、よしある賤の住家哉、つたの紅葉を軒に這はせて。

寄紅葉戀。

わがなみだ時雨の雨にたぐへばや、紅葉のいろの袖にまがへる。

あづまへまかりけるに、しのぶのおくに待りける社のもみぢを。

ときはなる松の綠も神さびて、紅葉ぞ秋はあけの玉垣。

草花野路落葉。

紅葉ちる野原をわけてゆく人は、花ならぬまで錦きるべし。

秋の末に法輪にこもりてよめる。

大堰川、ゐせきによどむ水のいろに、秋ふかくなる程ぞ知らるる。

長樂寺は青京都圓山公園内にあつたといふことだが、今その名殘をとどめない。

をぐら山、鹿に秋のいろはあれや、梢のにしき風にたたれて。

わが物と秋の梢をおもふかな、小ぐらのさとにいへるせしより。

暮れはつる秋のかたみにしばし見ん、紅葉ちらすな、木枯しの風。

秋くるる月なみわかぬ山がつの、心うらやむけふの夕ぐれ。

冬

長樂寺にて、夜紅葉をおもふといふことを、人々よみけるに。

よもすがらをしげなく吹く嵐かな、わざと時雨のそむる紅葉を。

神無月、木ノ葉のおつるたびごとに、心うかるるみ山べのさと。

題しらず。

ねざめする人の心をわびしめて、時雨るゝ音は悲しかりけり。

山家落葉。

道もなし、やどは木ノ葉に埋もれぬ、まだきせさする冬ごもりかな。

木ノ葉散れば月に心ぞあくがるゝ、み山がくれに住まんと思ふに。

水上落葉。

立田姫、染めし梢のちるをりは、紅あらふ山かはのみづ。

落葉。

あらしはく庭の落葉のをしき哉、まことの塵になりぬと思へば。

瀧上落葉。

木枯しに嶺の紅葉やたぐふらん、むらごに見ゆる瀧の白絲。

山家時雨。

やどかこふはは木の柴の色をさへ、したひてそむる初時雨かな。

閑中時雨といふことを。

おのづから音する人もなかりけり、山めぐりする時雨ならでは。

野の渡りの枯れたる草といふことを、雙林寺にてよみけるに。

雙林寺今は僅に藥師堂一つ殘せり。京都圓山公園内。その開基は最澄にて、鳥羽天皇の歸依深く、皇女綾雲女王を以て住持とされたる。初め靈鷲山沙羅樹林寺と稱したる。雙林寺西行が愛櫻とて名がある。

さま〳〵に花さきたりと見し野べの、同じ色にも霜枯れにけり。

枯野の草をよめる。

分かねし袖に露をばとめ置きて、霜にくちぬるまのの萩原。

霜かづく枯野の草はさびしきに、いづくは人のこころとむらん。

冬のうたよみけるに。

難波江の入江の蘆に霜さえて、浦風さむき朝ぼらけかな。

山里の冬といふことを人々よみけるに。

玉まきし垣根のまくず霜がれて、さびしく見ゆる冬の山ざと。

寒夜旅宿。

旅ねすゝ草のまくらに霜さえて、有明の月の影ぞまたるる。

山家冬月。

月出づる嶺の木ノ葉も散りはてて、麓の里はうれしかるらん。

月かれたる草をてらす。

氷しく沼の蘆原風さえて、月もひかりぞさびしかりける。

庭上冬月といふことを。

さゆと見えて冬ふかくなる月かげは、水なき庭に氷をぞしく。

雪中鷹狩。

かきくらす雪にきぎすは見えねども、羽音に鈴をたぐへてぞやる。

ふる雪にと立も見えず埋もれて、とりどころなきみかりのの原。

夜初雪。

月出づる軒にもあらぬ山の端の、しらむもしるし、夜半のしら雪。

庭雪似月。

木の間もる月の影とも見ゆるかな、はだらにふれる庭のしら雪。

雪のうたよみけるに。

あらち山、さかしく下る谷もなく、かじきの道をつくるしら雪。

たゆみつつそりの早緒もつけなくに、積りにけりな、越のしら雪。

雪道をうづむ。

ふる雪にしをりし柴もうづもれて、おもはぬ山に冬ごもりする。

あきの頃、高野へまゐるべきよしたのめてまゐらざりける人のもとへ、雪ふりて後、申しつかはしける。

雪ふかくうづみてけりな、君くやと紅葉の錦しきし山路を。

雪朝待人といふことを。

わが宿に庭より外の道もがな、とひ來ん人のあとつけて見ん。

雪に庵うづもれて、せん方なく面白かりけり、今もきたらばとよみけんことを思ひ出てみける程に、鹿の分けてとほりけるを見て。

人こばと思ひて雪を見るほどに、しかあとつくることもありけり。

雪朝會友といふことを。

あととむる駒の行方はさもあらばあれ、嬉しく君に行きぞあひぬる。

社頭雪。

玉垣はあけも緣もうづもれて、雪おもしろき松の尾の山。

雪のうたども詠みけるに。

何となくくるる雪のおとまでも、山べは雪ぞあはれなりける。

雪ふれば野路も山路もうづもれて、遠近しらぬたびのそらかな。

卯の花の心地こそすれ、山里の、かきねの柴をうづむしら雪。

とへな君、夕ぐれになる庭の雪を、跡なきよりはあはれならまし。

櫻の木に霰のたばしるを見て。

ただはおちで枝をつたへる霰かな、つぼめる花のちる心地して。

月前炭竈といへることを。

限りあらん雲こそあらめ、炭竈の、烟に月にすすけぬるかな。

千鳥。

淡路がた、磯わのちどり聲しげし、せとの汐かぜさえまさる夜は。

霜さえて汀ふけ行く汐かぜを、おもひ知りけになくちどりかな。

やせ渡るみなとの風に月ふけて、鹽ひるかたにちどりなくなり。

氷止山水。

岩間せく木ノ葉分けこし山水を、つゆもらさぬは氷なりけり。

冬哥十首よみけるに。七首は異本に出づ

さゆる夜はよその空にぞをしもなく、氷りにけりな、こやの池水。

さえわたる浦かぜいかに寒からん、千鳥むれるるゆふさきの浦。

宿ごとにさびしからじとはげむべし、烟こめたる小野の山里。

題しらず。

山櫻、おもひよそへて眺むれば、木ごとの花は雪まさりけり。

仁和寺の御室にて、山家閑居見雪といふことをよませたまひけるに。

ふりつもる雪を友にて、春までは日をおくるべきみ山べの里。

山居雪といふことを。

年のうちはとふ人さらにあらじかし、雪も山路もふかき住家を。

世をのがれて、鞍馬のおくに侍りけるに、かけひの氷りて水まで來ざりけ

仁和寺御室は、覺性法親王のこと。

文治二年の歳末をいふのであらう。

るに、春になるまではかく侍るなり、と申しけるを聞きてよめる。

わりなしや、こほる筧の水ゆるに、おもひ捨てしし春のまたるる。

陸奥國にて、としの暮によめる。

常よりも心ぼそくぞおもほゆる、たびのそらにて年のくれぬる。

山家歳暮。

新しき柴のあみどをたちかへて、年の明くるを待ちわたるかな。

歳のくれに縣より都なる人のもとへ申しつかはしける。(?)

山ざとに家居をせずば見ましやは、紅ふかき秋のこずゑを。

つねなきことをよせて。

いつか我、昔の人といはるべき、かさなる年をおくりむかへて。

戀

名を聞きて尋ぬる戀。

あはざらんことをばしらず、帚木の、伏屋と聞きて尋ねゆくかな。

涙顯戀。

おぼつかな、いかにも人のくれはどり、あやむるまでにぬるる袖かな。

夢會戀。

なか〳〵に夢に嬉しきあふことは、うつつにものを思ふなりけり。

あふことを夢なりけりと、思ひわく、心の今朝はうらめしきかな。

あふと見ることを限りの夢路にて、さむる別のなからましかば。

夢とのみ思ひなさるる現こそ、あひ見ることのかひなかりけれ。

後朝。

あふことを忍ばざりせば、道芝の、露よりさきにおきてこましや。

後朝時鳥。

さらぬだにかへりやられぬしののめに、そへて語らふ時鳥かな。

後朝花橘。

かさねてはこらまほしきうつり香を、花橘に今朝たぐへつつ。

後朝霧。

やすらはん、大かたの夜は明けぬとも、やみとかこへる霧にこもりて。

逢ふてあはぬ戀。

つらくともあはずば何のならひにか、身のほど知らず人をうらみん。

さらばたださらでぞ人のやみなまし、さて後も又さもやあらじと。

寄糸戀。

しづのめがすすくる糸にゆづりおきて、思ふにたがふ戀もするかな。

寄梅戀。

さらばやと何おもはまし、梅の花、めづらしからぬ匂ひなりせば。

行きずりに一枝をりし梅が香の、深くも袖にしみにけるかな。

寄花戀。

つれもなき人にみせばや、櫻花、かせにしたがふ心よわさを。

花を見る心はよそにへだたりて、身につきたるは君がおもかげ。

寄殘花戀。

葉隱れにちり止まれる花のみぞ、しのびし人にあふここちする。

寄皈雁戀。

つれもなく絶えにし人を、かりがねの、かへる心と思はましかば。

寄草花戀。

朽ちて唯しをればよしや、わが袖も萩の下枝(シヅエ)の露によそへて。

寄鹿戀。

つま戀ひて人めつつまぬ鹿のねを、うらやむ袖のみさをなるかな。

寄苅萱戀。

一方に亂るともなきわが戀や、風さだまらぬ野べのかるかや。

寄霧戀。

夕霧のへだてなくこそ思ひつれ、かくれて君があはぬなりけり。

寄紅葉戀。

わが涙しぐれの雨にたぐへばや、紅葉のいろの袖にまがへる。

寄落葉戀。

朝ごとに聲ををさむる風のおとは、よをへてかるる人の心か。

寄氷戀。

春をまつ諏訪のわたりもあるものを、いつを限りにすべきつららぞ。

寄水鳥戀。

我袖のなみだかかるとぬれてあれな、うらやましきは池の鴛鴦。

かものかたに、ささきと申すさとに、冬ふかく侍りけるに、人々まうで來て、山里戀といふことを。

かけひにも君がつららやむすぶらん、心細くもたえぬなるかな。

商人に文をつくる戀といふことを。

おもひかね市の中には人おほみ、ゆかり尋ねてつくる玉づさ。

海路戀。

波のしのぐことをも何かわづらはん、君があふべき道と思はば。

九月二つありける年、閏月をいむ戀といふことを、人々よみけるに。

長月のあまりにつらき心にて、いむとは人のいふにやあるらん。

賀茂社にて、神に祈る戀といふことを、神主どもよみけるに。

天降る神のしるしのありなしを、つれなき人のゆくへにて見ん。

月。

月見ればいでやとよのみおもほえて、もたりにくくもなる心かな。

秋の夜の月やなみだをかこつらん、雲なき影をもてやつすとて。

天ノ原さゆるみ空は晴れながら、なみだぞ月のくまになるらん。

月を見る心のふしをとがにして、たよりえがほにぬるる袖かな。

思ひ出づる事はいつもといひながら、月には耐へぬ心なりけり。

君にいかで月にあらそふ程ばかり、めぐりあひつつ影を双べん。

白妙の衣かさぬる月かげの、さゆるま袖にかかるしらつゆ。
しのび寝の涙湛ふる袖のうらに、なづまずやどる秋のよの月。
物思ふ袖にも月はやどりけり、にごらで清める水ならねども。
戀しさをもよほす月のかげなれば、こぼれかかりてかこつ涙か。
うち絶えてなげく涙に、わが袖の、くちなばなどか月をやどさん。
よよふとも忘れがたみの思ひでは、袂に月のやどるばかりぞ。
涙ゆゑ隈なき月ぞ曇りぬる、あまのはら〳〵ねのみなかれて。
あやにくにしるくも月のやどるかな、よにまぎれてと思ふ袂に。
おもかげに君が姿を見つるより、俄かに月のくもりぬるかな。
よもすがら月をみがほにもてなして、心の闇にまよふころかな。
秋の月、物おもふ人のためとてや、影にあはれをそへて出づらん。
へだてたる人の心のくまにより、月をさやかに見ぬがかなしさ。
涙ゆゑつねはくもれる月なれば、ながれぬ折ぞ晴間なりける。

物思ふ心のくまをのごひすてて、くもらぬ月を見るよしもがな。
こひしさや思ひよわるとながむれば、いとど心をくだく月かな。
ともすれば月すむ空にあくがるる、心のはてをしるよしもがな。
眺むるになぐさむことはなけれども、月を友にて明かす頃かな。
秋の月、しのだの森の千枝よりも、茂きなげきやくまになるらん。

戀。

うちむかふそのあらましの面影を、まことになして見るよしもがな。
歎くとも知らばや人のおのづから、あはれと思ふこともあるべき。
涙川ふかく流るるみをならば、あさき人めにつつまざらまし。
うき度になどなと人を思へども、かなはで年のつもりぬるかな。
何せんにつれなかりしを恨みけん、あはずばかかる思せましや。
岩代の松風きけば物をおもふ、人も心はむすぼほれけり。
何とこはかずまへられぬ身の程に、人をうらむる心ありけん。

物おもへば千々に心ぞくだけぬる、信太の森の枝ならねども。
おぼつかな何の報のかへり來て、心せたむるあだとなるらん。
かきみだる心やすめの言くさは、あはれ〳〵となげくばかりぞ。
中々になるるつらさに比ぶれば、うとき恨はみさをなりけり。
さることのあるなりけりと、思ひ出て忍ぶ心を忍べとぞおもふ。
中々に思ひしるてふ言の葉は、とはぬに過ぎてうらめしきかな。
汲みて知る人もありけん、おのづから、ほりかねの井の底の心を。
烟立つ富士の思のあらそひて、よたけき戀をするがへぞゆく。
なみだ川、さかまくみをの底ふかみ、みなぎりあへぬわが心かな。
せと口に立てるうしほの大よどみ、よどむとしひもなき涙かな。
いそのまに波あらげなる折々は、うらみをかづく里のあま人。
東路やあひの中山ほどせばみ、心のおくの見えばこそあらめ。
いつとなく思にもゆるわが身かな、淺間の烟しめるよもなく。
はりま路やこころの須磨に關据ゑて、いかでわが身の戀をとどめん。
あはれてふなさけに戀のなぐさまば、問ふことの葉や嬉しからまし。
物おもひはまだ夕暮のままなるに、明けぬとつぐるしばどりのこゑ。
夢をなど夜ごろたのまで過ぎ來けん、さらであふべき君ならなくに。
さはといひて衣返してうちふせど、目のあはばやは夢も見るべき。
戀ひらるるうき名を人に立てじとて、忍ぶわりなきわが袂かな。
わりなしや、さこそ物思ふ袖ならめ、秋にあひてもおける露かな。
いかにせん、來ん世の海人となる程に、みるめかたくて過ぐる恨を。
秋ふかき野べの草葉にくらべばや、物おもふ頃の袖の白露。
物おもふ涙ややがてみつせ川、人をしづむる淵となるらん。

雜

題しらず。

五月五日の節會を略して、五日といつたのである。

何事も昔をきくはなさけありて、故あるさまに忍ばるるかな。

わが宿は山のあなたにあるものを、何とうき世をしらぬ心ぞ。

くもりなき鏡の上にゐる塵を、目にたてて見る世と思はばや。

ながらへんと思ふ心ぞ露もなき、いとふにだにもたらぬうき身は。

思ひいづる過ぎにし方を恥かしみ、有るに物うきこの世なりけり。

世につかふべかりける人の、こもりゐたりけるもとへつかはしける。

世の中にすまぬもよしや、秋の月、にごれる水のたたふさかりに。

五日、さうぶを人のつかはしたりける返事に。

世のうきにひかるる人は、あやめ草、心の根なき心ちこそすれ。

花たちばなによせて思ひをのべけるに。

世のうきを昔語になしはてて、花たちばなに思ひいでばや。

世にあらじとおもひける頃、東山にて人々霞によせて思ひをのべけるに。

空になる心は春のかすみにて、よにあらじとも思ひたつかな。

おなじ心をよみける。

世を厭ふ名をだにもさは止め置きて、數ならぬ身の思ひ出にせん。

いにしへ頃、東山に阿彌陀房と申しける上人の庵室にまかりて見けるに、

あはれとおぼえてよみける。

柴の庵と聞くはいやしき名なれども、世にこのもしきすまひなりけり。

侍從大納言成道のもとへ、後の世のことおどろかし申したりける返りごと

に。

おどろかす君によりてぞ、永き夜の、久しき夢はさむべかりける。

返し。

おどろかぬ心なりせば、世の中を、夢ぞと語るかひなからまし。

ある人さまかへて、仁和寺のおくなる所に住むと聞きて、まかりて尋ねけ

れば、あからさまに京にと聞きて、かへりにけり。その後人つかはして、

かくなんまゐりたりしと、申したる返りごとに。

立ちよりて柴の煙のあはれさを、いかがおもひし、冬の山ざと。

返　し。

山里に心はふかく住みながら、柴の煙のたちかへりにし。

この歌もそへられたりける。

をしからぬ身を捨てやらでふる程に、長き闇にや又迷ひなん。

返　し。

世をすてぬ心のうちに闇こめて、迷はんことは君ひとりかは。

したしき人々あまたありければ、おなじ心に誰も御らんぜよと、つかはしたりける返りごとに、又。

なべて皆はれせぬ闇のかなしさを、君しるべせよ、光みゆやと。

又返し。

思ふともいかにしてかはしるべせん、教ふる道に入らばこそあらめ。

おなじ院の帥の局、都の外のすみかとひ申さではいかがとて分けおはしたりける、ありがたくなん。歸るさに粉川へまゐられけるに、御山よりいで合ひたりけるを、しるべせよとありければ、具し申して粉川へまゐりたりけり。かかる序は今はあるまじきことなり、吹上みんといふことと、具せられたりける人々申し出でて、吹上へおはしけり。道より大雨風ふきて興なくなりにけり。さりとてはとて吹上に行きつきたりけれども、見所なき様にて、社に輿かき据ゑて、思ふにも似ざりけり、能因が苗代水にせきくだせとよみて、いひ傳へられたる物をと思ひて、社にかきつけける。

天くだる名を吹上の神ならば、雲はれのきて光あらはせ。

苗代にせきくだされし天の川、とむるも神の心なるべし。

かく書きたりければ、やがて西の風吹きかはりて、忽ちに雲はれて、うらうらと日なりにけり。末の代なれど、志いたりぬることには、しるしあらたなることを、人々申しつつ、信起して、吹上、若浦おもふやうに見てかへられにけり。

この歌の前に待賢門院の中納言局の事あり、異本に出でたれば省けり、都の外の棲ゝこの局のなり。

ある人世をのがれて北山寺にこもりゐたりと聞きて、尋ねまかりたりけるに、月あかかりければ。

世を捨てて谷ぞこに住む人見よと、嶺の木のまをいづる月かげ。

題しらず。

いつのよにながき眠の夢さめて、おどろく事のあらんとすらん。

きし方の見しよの夢にかはらねば、今もうつつの心ちやはする。

こえぬれば又も此世に歸りこぬ、しでの山こそ悲しかりしけれ。

はかなしや、あだに命の露きえて、野べにわが身の送りおかれん。

露の玉、消ゆれば又もおくものを、賴みもなきはわが身なりけり。

あればとてたのまれぬかな、明日は又、昨日と今日はいはるべければ。

秋の色は枯野ながらもあるものを、世のはかなさや、淺茅生の露。

范蠡が長男の心を。

捨てやらで命を終ふる人は皆、ちぢのこがねを持ちかへるなり。

一院とは鳥羽法皇のこと。保元元年七月二日崩。この夜鳥羽安樂壽院に葬れた。御年五十四。

公能は右大臣實能の長子。大炊御門といつた。

霞によせてつれなきことを。

なき人をかすめる空にまがふるは、道をへだつる心なるべし。

諸行無常のこころを。

はかなくて行きにし方を思ふにも、今もさこそは朝がほのつゆ。

一院かくれさせおはしまして、やがて御所へ渡しまゐらせける夜、高野より出で合ひて參りたりける、いと悲しかりけり。この後おはしますべき所御らんはじめける、そのかみの御もとに、右大臣實能大納言と申しける、さぶらはれけり、忍ばせおはしますことにて、又人さぶらはざりけり、その折の御供にさぶらひけることの思ひ出でられて、折しもこの夜にまゐりあひたる、昔今のことおもひつづけられてよみける。

今宵こそ思ひしらるれ、淺からぬ君に契のある身なりけり。

右大將公能父のぶくの中に、母なくなりぬとききて、高野よりとぶらひ申しける。

二條天皇は御白河院の長子。保元三年十二月二十日即位時に御年十六。永萬元年七月二十八日崩年二十三。

かさね着るふぢの衣をたよりにて、心のいろを染めよとぞ思ふ。
（この歌、異本にあり、次に返歌あるゆゑ、重れてあぐ）
返　し。
藤衣かさぬるいろは深けれど、あさき心のしまぬばかりぞ。
同じなげきし侍りける人のもとへ。
君がため秋は世のうき折なれや、去年もことしも物を思ひて。
返　し。
晴れやらぬ去年の時雨の上に又、かきくらさるる山めぐりかな。
母なくなりて、山寺にこもり居たりける人を、程へて思ひ出でて、人のとひたりければ、かはりて。
思ひ出づるなさけを人のおなじくば、その折とへな、嬉しからまし。
父のはかなくなりにけるそとばを見てかへりける人に。
なき跡をそとばかり見てかへるらん、人の心を思ひこそやれ。
五十日のはてつかたに、二條院の御はかに御佛供養しける人にぐしてまゐりたりけるに、月あかくてあはれなりければ。
こよひ君、しでの山路の月を見て、雲の上をや思ひいづらん。
御跡に參河内侍さぶらひけるに、九月十三夜ひとにかはりて。
かくれにし君がみ影の戀しさに、月にむかひてねをやなくらん。
返　し。
内侍
わが君のひかりかくれし夕より、やみにぞまよふ、月はすめども。
寄紅葉懐舊といふことを法金剛院にてよみけるに。
古へをこふる涙の色に似て、袂に散るはもみぢなりけり。
ゆかりなくなりてすみうかれにける故郷へかへりゐける人の許へ。
住みすてしそのふる里をあらためて、昔にかへる心ちもやする。
侍從大納言入道はかなくなりて、宵曉につとめする僧各々かへりける日、申しおくりける。
行きちらんけふの別を思ふにも、さらに歎きはそふここちする。

成道のこと。

かへし。

臥し沈む身には心のあらばこそ、さらに歎きもそふここちせめ。

この歌も返しの外にぐせられたりける。

たぐひなき昔の人のかたみには、君をのみこそたのみましけれ。

かへし。

いにしへのかたみになると聞くからに、いとど露けき墨染の袖。

同日、なりつなが許へつかはしける。

なき跡もけふまでは猶名殘あるを、明日やわかれをそへて忍ばん。

返し。

おもへただけふの別のかなしさに、すがたを變へてしのぶ心を。

やがて其日さまかへて、後此返事かく申したりけり、いと哀なり、おなじさまに世をのがれて、大原にすみ侍りけるいもうとのはかなくなりにける哀とぶらひけるに。

いかばかり君おもはまし、道に入らで、たのもしからぬ別なりせば。

返し。

たのもしき道には入りてゆきしかど、我身をつめば如何とぞ思ふ。

院の二位の局みまかりける跡に、十の歌人々よみけるに。五首は異本に出づ

おくれゐて涙にしづむ故郷を、魂（タマ）のかげにもあはれとやみる。

跡をとふ道にや君は入りぬらん、苦しきしでの山へかからで。

名殘さへほどなく過ぎばかなしきに、七日の數を重ねずもがな。

跡しのぶ人にさへ又別るべき、その日をかねてしる涙かな。

跡のことども果てて、ちりぢりに成りにけるに、しげのり、なかのりなどきて、よみける。

涙ながして、けふにさへ又と申しける程に、南面の櫻に鶯の鳴きけるを聞

櫻花ちりぢりになる木のもとに、名殘ををしむ鶯のこゑ。

（この歌異本にあり、次に返歌あるゆゑ、置れてあぐ）

かへし。

少將なかのり

院の二位は紀伊の二位のこと。

靈憲とは信西三男櫻町中納言重範なり。少將俗範は同四男なり。母は紀伊二位。

この女も重憲、俯憲の兄弟。父信西の少納言を承けて、宮仕の時少納言といつたのである。

ちる花は又こん春もさきぬべし、別はいつかめぐりあふべき。

同日、くれけるままに、雨のかきくらしふりければ。

哀しる空も心のありければ、涙に雨をそふるなりけり。

かへし。　院少納言局

哀しる空にはあらじ、わび人の涙ぞけふは雨とふるらん。

行きちりて又の朝つかはしける。

けさはいかに思ひの色のまさるらん、昨日にさへも又別れつつ。

かへし。　少將なかのり

君にさへたち別れつつ、今日よりぞ、慰むかたはけになかりける。

兄の入道想空はかなくなりけるを、とはざりければ、いひつかはしける。

待ちわびぬ、後れ先だつ哀をも、君ならでさは誰かとふべき。　寂然

別れにし人のふたたび跡を見ば、うらみやせまし、とはぬ心を。

いかがせん、跡のあはれはとはずとも、別れし人のゆくへたづねよ。

中々にとはぬは深きかたもあらん、心淺くもうらみつるかな。

かへし。

わけ入りて蓬が露をこぼさじと、思ふも人をとふにあらずや。

へだてなき法の詞にたよりえて、はちすの露に哀かくらん。

なき人をしのぶ思ひのなぐさまば、跡をも千度とひこそはせめ。

御法をば詞なけれど說くと聞けば、深き哀はいはでこそ思へ。

無常の歌あまたよみける中に。

いづくにか眠り眠りて倒れ臥さんと、おもふかなしき道芝の露。

おどろかんと思ふ心のあらばやは、長きねぶりの夢もさむべく。

風あらき磯にかかれるあま人は、繫がぬ舟のここちこそすれ。

大波にひかれいでたるここちして、たすけ舟なき沖にゆらるる。

なき跡を誰としらねど、鳥邊山、おのおのすごきつかの夕暮。

波たかき世をこぎこぎて、人はみな舟岡山をとまりにぞする。

しにて伏さんこけの莚をおもふより、豫てしらるる岩かげの露。

露と消ば蓮臺野（ハスウテノ）におくりおけ、ねがふ心を名にあらはさん。

同行に侍りける上人、月の頃、天王寺にこもりたりと聞きて、いひつかはしける。

いとどいかに西にかたぶく月影を、常よりもけに君したふらん。

寂超入道談議すと聞きて、つかはしける。

ひろむらん、法にはあらぬ身なりとも、名を聞く數に入らざらめやは。

（この歌、異本にあり、次に返歌あるゆゑ、重れてあぐ）

かへし。

傳へきくながれなりとも、法の水、くむ人からや深くなるらん。

さだのぶ入道觀音寺に堂つくりに結緣すべきよし申しつかはすとて。

寺つくるこのわが谷につちうめよ、君ばかりこそ山もくづさめ。

觀音寺入道生光

かへし。

山くづすそのちからねはかたくとも、心だくみをそへこそはせめ。

人にかはりて、これもつかはしける。（この前に、阿闍梨勝命が法華經結緣させたる時によめる歌あり、異本に出でたれば省けり。）

いにしへにもれけんことの悲しさは、昨日の庭に心ゆきにき。

六波羅太政入道持經者千人あつめて、津ノ國和田と申す所にて供養侍りける、やがてその序に萬燈會しけり、夜更くるままに、灯の消えけるを、おのおのともしつぎけるを見て。

消えぬべき法の光の燈火を、かかぐる和田のみさきなりけり。

天王寺へまゐりて、龜井の水を見てよめる。

淺からぬ契のほどぞ汲まれぬる、龜井の水に影うつしつつ。

こころざすことありて、扇を佛にまゐらせけるに、新院より給はりけるに、女房承りて、つつみ紙にかき付けられける。

ありがたき法にあふぎの風ならば、心の塵をはらふとぞおもふ。
御かへし奉りける。
塵ばかり疑ふ心なからなん、法をあふぎてたのむとならば。
懺悔業障といふことを。
まどひつつ過ぎける方の悔しさに、なくなく身をぞ今はうらむる。
寄藤花述懷。
西をまつ心に藤をかけてこそ、その紫の雲をおもはめ。
見月思西といふ事を。
山のはにかくるる月をながむれば、我も心の西に入るかな。
人命不停、速於山水の心を。
山川のみなぎる水の音きけば、せむる命ぞ思ひしらるる。
菩提心論に乃至身命、而不慳惜文を。
あだならぬやがて悟に歸りけり、人のためにもすつる命は。

疏文に心自悟心自證心。
まどひきて悟りうべくもなかりつる、心を知るは心なりけり。
序品。
花の香をつらなる軒に吹きしめて、悟れと風のちらすなりけり。
譬諭品。
法しらぬ人をぞけにはうしと見る、三の車に心かけねば。
はかなくなりける人の跡に、五十日の中に、一品經供養しけるに、化城諭品。
やすむべき宿をばおもへ、中空の旅も何かは苦しかるべき。
五百弟子品。
おのづから清き心にみがかれて、玉とぎかくる法をしるかな。
提婆品。
これやさは年つもるまでこりつめし、法にあふこの薪なるらん。
いかにして聞くことのかく易からん、あだに思ひてえつる法かは。

いさぎよき玉を心にみがき出でて、いわけなき身に悟をぞえし。

壽量品。

さとりえし心の月のあらはれて、鷲の高ねにすむにぞありける。

なき人の跡に、一品經供養しけるに、壽量品を人に代りて。

雲はるる鷲のみ山の月影を、心すみてや君ながむらん。

一心欲見佛の文を、人々よみけるに。

鷲の山、誰かは月をみざるべき、心にかかる雲しなければ。

神力品、於我滅度後の文を。

行末の爲にとどめぬ法ならば、何か我身にたのみあらまし。

普賢品。

散りしきし花の匂の名殘おほみ、たたまうかりし法の庭かな。

無上菩提の心を。

鷲の山、上くらからぬ嶺なれば、あたりをはらふ有明の月。

和光同塵は結緣のはじめといふことをよみけるに。

いかなれば塵にまじりてます神に、つかふる人はきよまはるらん。

六道の歌よみけるに、地獄。

罪人のしめるよもなく燃ゆる火の、薪とならんことぞかなしき。

餓鬼。

朝夕の子をやしなひにすときけば、くにすぐれても悲しかるらん。

畜生。

神樂歌に草とりかふはいたけれど、なほその駒になることはうし。

修羅。

よしなしな、爭ふことをたてにして、怒をのみもむすぶ心は。

人。

ありがたき人になりけるかひありて、悟もとむる心あらなん。

天。

雲の上の樂みとてもかひぞなき、さてしもやがて住みしはてねば。

心に思ひけることを。

濁りたる心の水のすくなきに、何かは月の影やどるべき。

いかで我きよく曇らぬ身となりて、心の月の影をみがかん。

のがれなく遂にゆくべき道をさは、しらではいかがすぐべかりける。

おろかなる心にのみやまかすべき、しとなることもあるなる物を。

野にたてる枝なき木にもおとりけり、後の世しらぬ人の心は。

五首述懷三首は異本に出づ

哀しる涙の露ぞこぼれける、草の庵をむすぶちぎりは。

うかれいづる心は身にもかなはねば、いかなりとても如何にかはせん。

高野より京なる人の許へいひつかはしける。

住むことは所がらぞといひながら、たか野はものの哀なるべき。

閑中曉心といふことを、同夜。前に仁和寺の宮にて云々とあり、異本に出でたれば省けり。

嵐のみ時々窓におとづれて、明けぬる空の名殘をぞおもふ。

をささのとまりと申すところにて、露のしげかりければ。

わけ來つるをささの露にそぼちつつ、ほしぞわづらふ、墨染の袖。

あき頃、風わづらひける人を訪ひたりける返りごとに。

消えぬべき露の命も君がとふ、言の葉にこそおきゐられけれ。

かへし。

吹きすぐる風しやみなば、たのもしき、秋の野もせの露の白玉。

院の小侍從例ならぬこと大事にふし沈みて、年月へにけりと聞きて、訪ひにまかりたりけるに、このほど少しよろしき由申して、人にも聞かせぬ和琴の手ひきならしけるを聞きて。

琴のねに涙をそへてながすかな、たえなましかばと思ふ哀に。

（この歌、異本追加にあり、次に返歌あるゆゑ、貫れてあぐ）

かへし。

頼むべきこともなき身をけふまでも、何にかかれる玉の緒ならん。

小侍從に關し、古今著聞集第十一卷に、後白河院御所にいつよりものどかの近習の公卿にて、爾三人女房少々侯ひて云々の所に、院在位の時一夜小侍從を寵愛し玉ひし事あるといふことが書いてある。

風わづらひて、山寺へかへり入りけるに、人々訪ひてよろしくなりなば又と、申し侍りけるに、おのおの志を思ひ知りて。

定めなし、風わづらはぬ折だにも、又こんことを頼むべきよに。

あだに散る木葉につけて思ふかな、風さそふめる露の命を。

我なくばこの里人や秋ふかき、露を袂にかけてしのばん。

さまざまに哀おほかる別かな、心を君が宿にとどめて。

歸れども人の情にしたはれて、心は身にもそはずなりぬる。

かへしどもありける、聞き及ばねばかかず。

新院歌あつめさせおはしますときき、常磐に爲忠が歌の侍りけるを、かき集めてまゐらせける、大原より見せにつかはすとて。

寂　超長門入道

木の下にちる言の葉をかく程に、やがても袖のそほちぬるかな。

かへし。

新院とは恐らく後白河禪定法皇のことで、千載集の時のことであらうといふことである。

年ふれどくちぬときはの言の葉を、さぞ忍ぶらん、大原の里。

寂超爲忠が歌にわが歌かきぐし、又弟の寂然が歌などとりぐして、新院へまゐらせけるを、人とり傳へまゐらせけると聞きて、兄に侍りける想空が許より。

家の風傳ふばかりはなけれども、などか散らさぬなゆの言の葉。

かへし。

家の風むねと吹くべき木のもとは、今ちりなんと思ふ言の葉。

新院百首の歌めしけるに奉るとて、右大將公能のもとより、見せにつかはしたりける、返し申すとて。

家の風吹き傳へけるかひありて、散る言の葉のめづらしきかな。

（この歌、異本追加にあり、次に返歌あるゆゑ、重れてあぐ）

かへし。

家の風吹き傳ふとも、わかの浦にかひある言の葉にてこそしれ。

題知らず。

嶺渡る嵐はげしき山里に、そへてきこゆる瀧川の水。
水の音はさびしき庵の友なれや、峯の嵐のたえまたえまに。
鶉ふすかり田のひつち思ひ出でて、ほのかに照らす三日月の影。
濁るべき岩井の水にあらねども、汲まば宿れる月やさわがん。
ひとりすむ庵に月のさしこずば、何か山べの友とならまし。
尋ね來てことゝふ人もなき宿に、木の間の月の影ぞさし入る。
晴間なく雲こそ空にみちにけれ、月見ることはおもひ絶えなん。
ぬるれども雨もる宿の嬉しきは、入りこむ月を思ふなりけり。
分けいりて誰かは人の尋ぬべき、岩かけ草のしげる山路を。
つらなりて風に亂れて鳴く雁の、しどろに聲のきこゆなるかな。
晴れがたき山路の雲にうづもれて、こけの袂は霧くちにけり。
つづらはふ端山は下も茂ければ、住む人いかにこぐらかるらん。
霰にぞ物めかしくはきこえける、枯れたる楢の柴の落葉は。

柴かこふ庵のうちはたびだちて、すどほる風もとまらざりけり。
みをよどむあまの川岸波かけて、月をば見るやさくさみの神。
いはれ野の萩が絶間のひまぐに、このてがしはの花さきにけり。
衣手にうつりし花の色なれや、袖ほころぶる萩が花ずり。
小ささ原、葉末の露の玉に似て、はしなき山をゆくここちする。
ね渡しにしるしの竿やたてつらん、こひのまちつるこしの中山。
雲鳥やしこき山路はさておきて、ををちが原のさびしからぬか。
あれにける澤田の畦にくらら生ひて、秋まつべくもなきわたるかな。
つたひくる筧をたえずまかすれば、山田は水もおもはざりけり。
身にしみし荻の音にはかはれども、柴吹く風もあはれなりけり。
空はるる雲なりけりな、吉野山、花もてわたる風とみたれば。
雲もかかれ、花とも春は見て過ぎん、いづれの山もあだに思はで。
雲かかる山とは我も思ひ出づよ、花ゆゑなれしむつび忘れず。

山もなき海の面にたなびきて、波の花にもまがふ白雲。
浪につきて磯わにいます荒神は、鹽ふむきねを待つにやあるらん。
荒磯の波にそなれてはふ松は、みさごのゐるぞたよりなりける。
淡路島、せとのなごろは高くとも、この汐わだにおし渡らばや。
汐路ゆくかこみのともろ心せよ、またうづはやき瀬戸わたるなり。
磯にをる浪のけは〳〵く見ゆるかな、沖になごろや高くゆくらん。
くれ舟よ、朝妻わたり今朝なよせそ、伊吹のたけに雪しまくなり。
近江路や野ぢの旅人急がなん、野洲がはらとて遠からぬかは。
錦をばいく野べこゆる唐櫃に、をさめて秋はゆくにかあるらん。
朝かへるかりゐうなこのむら鳥は、原のをがやに聲やしぬらん。
すがるふすこぐれが下の葛まきを、吹きうらがへす秋の初風。
もろ聲にもりかきみかぞ聞ゆなる、いひ合せてや妻をこふらん。
蓬生はさることなれや、庭の面に、からす扇のなぞ茂るらん。

かり殘すみつの眞菰にかくろひて、かけもちがほに鳴く蛙かな。
柳原、川風ふかぬ陰ならば、あつくや蟬の聲にならまし。
月のためみさびするゐじとおもひしに、綠にもしく池の浮草。
いそのかみ古きすみかへ分け入れば、庭の淺茅に露ぞこぼるる。
とをくだすひたの面にひくしほは、しづむ心ぞかなしかりける。
ませにさく花にむつれてとぶ蝶の、羨しきもはかなかりけり。
うつりゆく色をば知らず、ことの葉の、名さへあだなる露草の花。
古郷の蓬は宿の何なれば、あれゆく庭にまづしげるらん。
人もこず、心もちらで山里は、花を見るにもたよりありけり。
風の音に物おもふわが色そめて、身にしみ渡る秋の夕暮。
我なれや、風をわづらふ篠だけは、おきふし物の心ぼそくて。
こん世にもかかる月をし見るべくば、命ををしむ人なからまし。
この世にて眺めなれぬる月なれば、迷はん暗もてらさざらめや。

八月、つきの頃、夜ふけて北白川へまかりけり、よしある樣なる家の侍りけるに、琴の音のしければ、たちとまりて聞きけり、折哀に、秋風樂と申すがくなりけり。庭をみいれければ、淺茅の露に月のやどれるけしき、あはれなり。垣にそひたる荻の風、身にしむらんとおぼえて、申し入れてとほりけり。

秋風のことに身にしむこよひかな、月さへすめる宿のけしきに。

深夜水聲といふことを、高野にて人々よみけるに。

まぎれつる窓の嵐の聲とめて、ふくると告ぐる水の音かな。

竹風驚夢。

玉みがく露ぞ枕にちりかかる、夢おどろかす竹のあらしに。

山寺夕暮といふことを、人々よみ侍りけるに。

嶺おろす松の嵐のおとに又、ひびきをそふる入あひの鐘。

海邊重旅宿といへることを。

時忠は平大納言時忠のこと。

波ちかき磯の松がね枕にて、うらがなしきはこよひのみかは。

寂然高野に詣りて、立ちかへりて大原よりつかはしける。

へだてこしその年月もあるものを、名殘おほかる嶺の朝霧。

かへし。

したはれし名殘をこそはながめつれ、立ちかへりにし嶺の朝霧。

常よりも道たどらるるほどに、雪深かりける頃、高野へまゐると聞きて、中宮大夫のもとより、いつか都へは出づべき、かかる雪にはいかにと、申したりければ、返りごとに。

雪分けて深き山路にこもりなば、年かへりてや君にあふべき。

時忠卿

かへし。

分けてゆく山路の雪は深くとも、とく立ち歸れ、年にたぐへて。

山ごもりして侍りけるに、年をこめて春になりぬと、聞きけるからに、霞わたりて、山川の音日頃にも似ずきこえければ。

かすめども年の内とは分かぬまに、春をつぐなる山川の水。

としのうちに春立ちて、雨のふりければ。

春としも猶おもはれぬ心かな、雨ふるとしのここちのみして。

正月元日、雨ふりけるに。

いつしかも初春雨ぞふりにける、野邊の若葉もおひやしぬらん。

山深く住み侍りけるに、春たちぬと聞きて。

山路こそ雪の下水とけざらめ、都の空は春めきぬらん。

深山不知春といふことを。

雪分けて外山が谷の鶯は、ふもとの里に春やつぐらん。

嵯峨にまかりたりけるに、雪深かりけるを、見おきて出でしことなど、申しつかはすとて。

おぼつかな、春の日數のふるままに、さがのの雪は消えやしぬらん。

かへし。

『みやたて』は身分高くないが賤しくない中位の女房をいふ。『はしたもの』……枕草紙に人の家につき〳〵しきもの、童女、はしたものなどと書いてある。

たちかへり君やとひくとまつ程に、まだ消えやらず野邊のあわ雪。

國々めぐりまはりて春かへりて吉野の方へまからんとしけるに、人のこの程はいづくにか跡とむべきと、申しければ。

花をみし昔の心あらためて、吉野の里にすまんとぞおもふ。

みやたてと申しけるはしたものの、歳たかくなりて、さまかへなどして、ゆかりにつきて吉野に住み侍りけり、思ひかけぬやうなれども、供養をのべん料にとて、くだ物を高野の御山へつかはしけるに、花と申すくだ物侍りけるを見て、申しつかはしける。

をりびつに花のくだ物積みてけり、吉野の人のみやたてにして。

みやたて

かへし。

こころざし深くはこべるみやたてを、悟ひらけん花にたぐへて。

櫻にならびてたてりける柳に、花のちりかかりけるを見て。

吹きみだる風になびくとみし程は、花ぞむすべる青柳の絲。

正木は一名玉つばき。その葉冬にも青い、故に冬青ともいふ。和漢三才圖に、冬青木肌白く有レ文、作二家齒一筋。其堪レ染緋とある。

覺堅は少納言信西の子。文治五年法印大僧都。この歌の頃は仁和寺子院にあつたらしい。

寂然もみぢのさかりに高野に詣でて出でにける、又の年の花のをりに申しつかはしける。

紅葉みし高野の峰の花ざかり、たのめし人の待たるるやなぞ。

寂然

ともにみし嶺の紅葉のかひなれや、花の折にも思ひいでける。

かづらきを尋ね侍りけるに、折にもあらぬ紅葉の見えけるを、何ぞと問ひければ、正木なりと申すを聞きて。

かづらきや正木のいろは秋に似て、よその梢の綠なるかな。

天王寺へまゐりたりけるに、松に鷺の居たりけるを、月のひかりに見て。

庭よりも鷺居る松の梢にぞ、雪はつもれる、夏のよの月。

高野より出でたりけると、覺堅阿闍梨しらぬさまなりければ、菊をつかはすとて。

くみてなど心通はばとはざらん、出でたる物を、菊の下水。

宮の法印は仁和寺覺性のこと。

かへし。

谷ふかく住むかとおもひてとはぬまに、うらみを結ぶ菊の下水。

たびにまかりけるに、入あひを聞きて、

おもへただ、くれぬとききし鐘のねは、都にてだに悲しきものを。

宮の法印高野にこもらせたまひて、おぼろげにては出でじと思ふに、修行せまほしき由かたらせ給ひけり。千日果てて、みたけにまゐらせ給ひて、いひつかはしける。

あくがれし心を道のしるべにて、雲に友なふ身とぞなりぬる。

かへし。

山の端に月すむまじとしられにき、心の空になるとみしより。

年頃申しなれたりける人に、とほく修行するよし申して罷りたりける、名残おほくて立ちけるに、紅葉のしたりけるを見せまほしくて侍りつる、かひなくいかにと、申しければ、木の下に立ちよりてよみける。

かくけん

心をば深きもみぢの色に染めて、別れて行くや散るになるらん。

駿河の國久能の山寺にて、月を見てよみける。

涙のみかきくらさるる旅なれや、さやかに見よと月はすめども。

題しらず。

身にもしみ物あらげなる氣色さへ、哀をせむる風のおとかな。

いかでかは音に心のすまざらん、草木もなびく嵐なりけり。

松風はいつもときはに身にしめど、分けてさびしき夕暮の空。

年久しく相たのみたりける同行に放れて、遠く修行して、かへらずもやと思ひけるに、何となく哀にてよみける。

さだめなし、いくとせ君になれ〳〵て、別を今日は思ふなるらん。

年頃ちき渡りける人に、初めて對面申して、かへる朝に。

別るともなるる思ひをかさねまし、過ぎにし方の今宵なりせば。

修行して伊勢にまかりたりけるに、月の頃、都おもひ出でられてよみける。

同行とは例の如く西住上人のことであらう。

交野は河内國交野郡交野今北河内郡にて古昔遊獵の地。天の川も同處

古今集卷の九在原業平の歌「狩暮し七夕つめに宿からむ天の川原にわれは來にけり」とあるを引いていつたのである。

美豆野は山城國今淀と八幡との中間。昔ここに牧場があつたので『みつのみくさにつながれて』といつたのである。

都にも旅なる月のかげをこそ、おなじ雲ゐの空にみるらめ。

天王寺へまゐりけるに、交野など申すわたり過ぎて、みはるかされたる所の侍りけるを、とひければ、あまの川と申すを聞きて、宿からんといひけんこと、思ひ出されてよみける。

あくがれし天の川原と聞くからに、昔の波の袖にかかれる。

四國の方へぐしてまかりたりける同行の、都へ歸りけるに。

歸りゆく人の心を思ふにも、はなれがたきは都なりけり。

旅の歌よみける。

草枕たびなる袖におく露を、都の人や夢に見るらん。

きこえつる都へだつる山さへに、はては霞に消えにけるかな。

西の國の方へ修行して、まかり侍るとて、みつのと申す所に、ぐしならひたる同行の侍りけるに、親しきものの例ならぬこと侍りとて、ぐせざりければ。

大峯は大和吉野郡金峯山のこと。

平等院とは行尊僧正の事。「花より外」とは金葉集雜上に「もろともにあはれとおもへ山櫻はなより外に知る人もなし」とあるをいふ。行尊は大峰行者として著名なる人。

山城のみつのみくさにつながれて、駒ものうげに見ゆる旅かな。

大峯のしんせんと申す所にて、月をよみける。

嶺の上もおなじ月こそてらすらめ、所からなる哀なるべし。

こいけと申す宿にて。

いかにして梢のひまをもとめえて、こいけに今宵月のすむらん。

あづまやと申すところにて、時雨の後、月を見て。

神無月、時雨はるればあづまやの、嶺にぞ月はむねとすみける。

神無月、谷にぞ雲はしぐるめる、月すむ嶺は秋にかはらで。

ふるやと申す宿にて。

神無月、しぐれふるやにすむ月は、くもらぬ影もたのまれぬかな。

平等院の名かかれたる卒都婆に紅葉のちりかかりけるを見て、花より外のとありけん人ぞかしと、あはれに覺えてよみける。

あはれとも花みし嶺に名をとめて、紅葉ぞけふは共にちりける。

大宮は近衛川原大宮にて太皇太后多子のこと。女房加賀はそこに仕へし女房のこと。

轉法輪のたけと申す所にて、釋迦の說法の坐の石と申す所を拜みて。

ここここそは法とかれたる所よと、聞く悟をも得つる今日かな。

修行して遠くまかりけるをり、人の思ひへだてたるやうなることの侍りければ。

よしさらば幾重ともなく山こえて、やがても人に隔てられなん。

しほ湯にまかりたりけるに、具したりける人、九月晦日にさきへ上りければ、つかはしける人に代りて。

秋はくれ、君は都へ上りなば、あはれなるべき旅の空かな。

大宮の女房加賀

かへし。

君をおきて立ちいづる空のつゆけさは、秋さへくるる旅の悲しさ。

しほ湯いでて都へ歸りまうで來て、故郷の花霜がれにける、哀なりけり、

急ぎ歸りし人の許へ、又代りて。

露おきし庭の小萩もかれにけり、いづち都に秋とまるらん。

かへし。

したふ秋は露もとまらぬ都へと、などて急ぎし舟出なるらん。

おなじ人

さきに入りて、しのぶと申すわたり、あらぬ世のことに覺えて、哀なり。

都出でし日數思ひつづけければ、霞と共にと侍ることの、跡たどるまで來にける、心ひとつに思ひ知られて、よみける。この前の歌の小序に陸奥へ修行ば省けり、このあたりの歌はそのつづきなり。し云々とあり、異本に出でたれ

都出でてあふ坂こえし折までは、心かすめし白河の關。

武隈の松は昔になりたりけれども、跡をだにとて、見にまかりてよみける。

かれにける松なき宿のたけくまは、みきといひてもかひなからまし。

ふりたる棚橋を紅葉の埋みたりけるわたり、にくくてやすらはれて、人に尋ねければ、おもはくの橋と申すはこれなりと、申しけるを聞きて。

ふままうき紅葉の錦ちりしきて、人も通はぬおもはくの橋。

しのぶの里より奥に、二日ばかりいりてあり。

文治二年十月十二日のこと。

文治三年の三月のこと。

下野國にて、柴の煙を見てよみける。

都ちかき小野大原をおもひいづる、柴の煙の哀なるかな。

名取川を渡りけるに、岸の紅葉のかげを見て。

名取川、きしの紅葉のうつるかげは、同じ錦を底にさへしく。

十月十二日、平泉にまかりつきたりけるに、雪ふり、嵐はげしく、ことの外にあれたりけり。いつしか衣川みまほしくて、まかりむかひて見けり。

川の岸につきて、衣川の城しまはしたる事がら、樣かはりて物を見る心ちしけり。汀こほりて取分けさびければ。

とりわきて心もしみてさえぞ渡る。衣川みにきたるけふしも。

又の年の三月に、出羽國に、こえて、瀧の山と申す山寺に侍りける、櫻の常よりも薄紅の色こき花にてなみたてりけるを、寺の人々も見興じければ。

たぐひなき思ひいでは櫻かな、薄くれなゐの花の匂ひは。

あかしに人を待ちて、日數へにけるに。

崇德天皇のこと。讃岐へ流された時女房三人を伴はれた。

小島は備前の兒島のことであらう。

何となく都のかたと聞く空は、むつまじくてぞながめられける。

新院讃岐におはしましけるに、たよりに付けて、女房のもとより。

水莖のかきながすべき方ぞなき、心のうちは汲みてしらなん。

かへし。

程とほみかよふ心のゆくばかり、なほかきながせ水莖の跡。

又女房つかはしける。

かかりける涙にしづむ身のうさを、君ならで又誰かうかべん。

同じ折、つぼの櫻のちりけるを見て、かくなんおぼえ侍りと申しける。

この前の歌の小序に、菩提院の前齋宮に云々とあり、異本に出でたれば省けり、その折をいへるなり。

この春は君に別のをしきかな、花のゆくへは思ひわすれて。

返しせよと承りて、扇にかきて、さしいでける。女房六角局。

君がいなんかたみにすべき櫻さへ、名殘あらせず風さそふなり。

西國へ修行してまかりける折、小島と申す所に、八幡のいははれ給ひたりけるに籠りたりけり。年へて又その社を見けるに、松どもの古木になりたりけるをみて。

昔みし松は老木になりにけり、わが年へたるほどもしられて。

山里にまかりて侍りけるに、竹の風の荻にまがひてきこえければ。

竹の音も荻ふく風の少きに、くはへて聞けばやさしかりけり。

世をのがれて嵯峨に住みける人の許にまかりて、後世のこと怠らずつとむべきよし申して、歸りけるに、竹の柱をたてたりけるを見て。

よよふとも竹の柱の一筋に、たてたるふしはかはらざらなん。

題しらず。

哀ただ草の庵のさびしきは、風より外にとふ人ぞなき。

哀なり、よりよりしらぬ野の末に、かせぎを友になるるすみかは。

高野にこもりたる人を、京より、何ごとか、又いつかいづべきと、申したるよしききて、その人に代りて。

山水のいつ出づべしと思はねば、心ぼそくてすむとしらずや。

松の絶間より、纔かに月のかげろひてみえけるを見て。

影うすみ松のたえまをもりきつつ、心ぼそくや三日月の空。

木蔭の納涼といふことを、人々よみけるに。

けふも又松の風吹く岡へゆかん、昨日涼みし友にあふやと。

入日の影かくれけるままに、月の窓にさし入りければ。

さしきつる窓の入日をあらためて、光をかふる夕月夜かな。

月蝕を題にて歌よみけるに。

いむといひて影にあたらぬ今宵しも、われて月みる名や立ちぬらん。

寂然入道大原にすみけるにつかはしける。

大原は比良の高ねの近ければ、雪ふるほどを思ひこそやれ。

（この歌、異本追加にあり、次に返歌あるゆゑ、重ねておく）

かへし。

思へただ都にてだに袖さえし、ひらの高ねの雪のけしきは。

高野の奥の院の橋の上にて、月あかかりければ、もろともに眺めあかして、その頃、西住上人都へ出でにけり。その夜の月忘れがたくて、又おなじ橋の月の頃、西住上人の許へいひつかはしける。

ことごとなく君こひ渡る、橋の上に、あらそふものは月の影のみ。

かへし。

西住上人

思ひやる心は見えて、橋の上にあらそひけりな、月の影のみ。

人あまたして、一人にかくして、あらぬさまにいひなしけることの侍りけるをききてよめる。

一すじにいかで柚木のそろひけん、いつよりつくる心だくみに。

陰陽頭に侍りけるものに、ある所のはしたもの物申しけり。いとおもふようにもなかりければ、六月晦日につかはしけるに、代りて。

わが爲につらき心を、みな月の、てづからやがてはらひすてなん。

おなじ畫に、とまのうちにねおどろきたる所に。（この前に屏風の畫をよみたる歌一首あり、異本に出で）

たれば省けり、そのつづきなり。

磯による波に心のあらはれて、寢ざめがちなるとまやかたかな。

庚申の夜、くじ配りて歌よみけるに、古今、後撰、拾遺、これを梅、櫻、山吹によせたる題をとりてよみける。

古今、梅によす。

紅の色こき梅を折る人の、袖にはふかき香やとまるらん。

後撰、櫻によす。

春風の吹きおこせんに、櫻花、となりくるしく主やおもはん。

拾遺、山吹によす。

山吹の花さく井手の里こそは、やしうゐたりと思はざらなん。

祝。

ひまもなくふりくる雨の脚よりも、數かぎりなき君がみよかな。

苔うづむゆるがぬ岩のふかきねは、君の千歳をかためたるべし。

むれ立ちて雲ゐにたづの聲すなり、君が千歳や空に見ゆらん。

澤べより巣立はじむる鶴の子は、松の下にやうつりすむらん。

大海の汐ひて山になるまでに、君はかはらぬ君にましませ。

君が代は天つ空なる星なれや、數もしられぬ心ちのみして。

ひかりさす三笠の山の朝日こそ、げに萬代のためしなりけれ。

萬代のためしにひかん、かめ山の、裾野の原にしげる小松を。

數かくる波に下枝（シヅエ）の色そめて、神さびまさる住の江の松。

竹の色も君が綠にそめられて、いく世ともなく久しかるべし。

うまごまうけて悅びける人のもとへいひつかはしける。

千代ふべき二葉の松の生さきを、みる人いかに嬉しかるらん。

五葉の下に二葉なる小松どもの侍りけるを、子日にあたりける日、折櫃に

ひきうゑてつかはすとて。

君がため五葉の子日しつるかな、たび〳〵千代をふべきしるしに。

此二首は菩提院中將公衡の氏かはいと尾ねる次郎。
菩提院與山籠し聞集つてなかにか：
：うの著書西行公衡中將の
ぬきあてるばのぬ狩衣縹織物のうてのし指高欄庭賈のふみくにのかしろ見られき聞け
。菩提院行公衡たづひへれ給
。寄りぬ櫻ぬ跳めるて
。櫻ぬ
。

ただの松ひきそへて、この松のおもふこと申すべくなんとて。

子日する野邊の我こそ主なるを、ごえふなしとてひく人のなき。

世につかへぬべきやうなるゆかりあまたありける人の、さもなかりける事を思ひて、清水に年こしにこもりたりけるにつかはしける。

この春はえだ〴〵ごとに榮ゆべし、枯れたる木だに花はさくめり。

是もぐして。

あはれびの深きちかひに頼もしき、清きながれの底くまれつつ。

八條院の宮と申しけるを、白河殿にて虫合せられけるに、人に代りて、虫入れてとり出しける物に、水に月のうつりたる由をつくりて、その心をよみける。

行末の名にやながれん、常よりも、月すみ渡る白川の水。

内に貝あはせせんと、せさせ給ひけるに、人に代りて。

風たたで波ををさむる浦々に、小貝をむれてひろふなりけり。

八條院は鳥羽法皇の三女。法皇の御寵愛深かつた御方

なにはがた、汐干にむれて出でたたん、しらすの崎の小貝ひろひに。

波よするしらすの濱のからす貝、拾ひやすくもおもほゆるかな。

入道寂然大原に住み侍りけるに、高野よりつかはしける。

山ふかみさこそあらめときこえつつ、音哀なる谷川の水。

山ふかみ槇の葉わくる月影は、はげしきもののすごきなりけり。

山ふかみ窓のつれづれとふものは、色づきそむるはじの立枝ぞ。

山ふかみ苔のむしろの上に居て、何心なく鳴くましらかな。

山ふかみ岩にしたたる水とめん、かずかずおつる橡ひろふほど。

山ふかみけぢかき鳥の音はせで、物おそろしき梟のこゑ。

山ふかみこぐらき嶺の梢より、ものものしくも渡るあらしか。

山ふかみほだきるなりときこえつつ、所にぎはふ斧の音かな。

山ふかみいりてみとみる物はみな、哀もよほすけしきなるかな。

かへし。

あはれさはかうやと君も思ひしれ、秋くれ方の大原の里。

ひとりすむおぼろの清水、友とては月をぞすます、大原の里。

すみがまのたなびく煙一すぢに、心ぼそきは大原の里。

何となく露ぞこぼるる、秋の田の、ひた引きならす大原の里。

あだに吹く草の庵のあはれより、袖に露おく大原の里。

山風に嶺のささ栗はらはらと、庭におちしく大原の里。

ますらをがつま木にあけびさしそへて、暮るれば歸る大原の里。

葺はふ門は木の葉にうづもれて、人もさしこぬ大原の里。

もろともに秋も山路も深ければ、しかぞかなしき大原の里。

神樂に、星を。

ふけて出づるみ山も嶺のあか星は、月まちえたるここちこそすれ。

北まつりの頃、賀茂にまゐりたりけるに、折うれしくて、待たるる程に、つかひまゐりたり。はし殿につきてついふし拜まるるまではさることにて、

賀茂の祭禮の頃のこと。男山八幡に對して賀茂祭を北祭といふ。

舞人のけしきふるまひ、みしよのことともおぼえず、東遊にことうつ陪從(ベイジウ)もなかりけり。さこそ末の世ならめ、神いかに見給ふらんと、はづかしき心ちして、よみ侍りける。

神の代もかはりにけりとみゆるかな、そのことわざのあらずなるにて。

ふけゆくままに、御手洗のおと神さびてきこえければ。

みたらしのながれはいつもかはらぬを、末にしなればあさましのよや。

伊勢に齋王おはしまさで、年へにけり。齋宮木立ばかりさかとみえて、築垣もなきやうになりたりけるを見て。

いつか又いつきの宮のいつかれて、注連のみうちに塵をはらはん。

讃岐へおはしまして後、歌といふことの世にいときこえざりければ、寂然が許へいひつかはしける。この前に新院のことをいへる歌あり、異本に出でたれば省けり、これもそのつゞきなり。

ことの葉のなさけ絶えにし折節に、ありあふ身こそ悲しかりけれ。

かへし。

寂然

しきしまや絶えぬる道になくなくも、君とのみこそ跡を忍ばめ。

讃岐にて御心ひきかへて、後の世の事、御つとめひまなくせさせおはしますと聞きて、女房の許へ申しける。この文をかきて

若人不嗔打、以何修忍辱。

世の中を背くたよりしながらまし、うき折節に君があはずば。

これもついでにぐしまゐらせける。

あさましや、いかなる故の報にて、かかることしもある世なるらん。

ながらへて遂にすむべき都かは、この世はよしやとてもかくても。

幻の夢うつつに見る人は、目もあはせでや夜をあかすらん。

かくて後、人のまゐりけるに。

その日よりおつる涙をかたみにて、思ひ忘るる時のまぞなき。

女房

かへし。

目の前にかはり果てにし世のうきに、涙を君もながしけるかな。

松山の涙は海にふかくなりて、はちすの池にいれよとぞおもふ。

波のたつ心の水をしづめつつ、咲かんはちすを今はまつかな。

老人述懐といふことを、人々よみけるに。

山ふかみ杖にすがりて入る人の、心の底のはづかしきかな。

戀百十首。十九首は異本に出づ

思ひあまりいひ出でてこそ、池水の、ふかき心の色はしられめ。

なき名こそ飾磨の市にたちにけれ、まだあひそめぬ戀するものを。

つつめども涙の色にあらはれて、しのぶ思ひは袖よりぞちる。

氣色をばあやめて人の咎むとも、うちまかせてはいはじとぞ思ふ。

心には忍ぶと思ふかひもなく、しるきは戀のなみだなりけり。

いろに出でていつより物は思ふぞと、問ふ人あらばいかがこたへん。

あふことのなくてやみぬる物ならば、今みよ、世にもありや果つると。

うき身とて忍ばば戀の忍ばれて、人の名だてになりもこそすれ。

歎きあまり筆のすさびに盡せども、思ふばかりはかかれざりけり。
わがなげく心のうちの苦しきを、何とたとへて君にしられん。
今はただ忍ぶ心ぞつつまれぬ、歎かば人やおもひしるとて。
心にはふかくしめども、梅の花、をらぬ匂ひはかひなかりけり。
さりとよとほのかに人を見つれども、さめぬは夢のここちこそすれ。
さるほどの契は何にありながら、行かぬ心のくるしきやなぞ。
今はさはさめぬを夢になしはてて、人に語らでやみねとぞおもふ。
をる人の手にはたまらで、梅の花、誰が移り香にならんとすらん。
うたたねの夢を厭ひし床の上の、今朝いかばかり起きうかるらん。
引きかへて嬉しかるらん心にも、うかりしことを忘れざらなん。
七夕はあふを嬉しとおもふらん、我は別れのうきこよひかな。
同じくば咲きそめしよりしめおきて、人にをられぬ花と思はん。
朝霧にぬれにし袖をほすほどに、やがて夕だつわがなみだかな。

待ちかねて夢にみゆやとまどろめば、寢覺すすむる荻の上風。
つつめども人しる戀や、大堰川、ゐせきのひまをくぐる白波。
いつかはと答へんことのねたきかな、思ひもしらず恨みきかせよ。
あやにくに人めもしらぬ涙かな、たへぬ心にしのぶかひなく。
荻の音は物おもふ我に何なれば、こぼるる露に袖のしをるる。
草しげみ澤にぬはれてふす鳴の、いかによそだつ人の心ぞ。
いかにせん、うき名をよよにたてはてて、思ひもしらぬ人の心を。
忘られんことをかさねて思ひにき、などおどろかす涙なるらん。
とはれぬもとはぬ心のつれなさも、憂きはかはらぬ心ちこそすれ。
つらからん人ゆゑ身をば恨みじと、思ひしかどもかなはざりけり。
今さらに何かは人のとがむべき、はじめてぬるる袂ならねば。
わりなしな袖になげきのみつままに、命をのみもいとふ心は。
色ふかき涙の河の水上は、人をわすれぬ心なりけり。

待ちかねてひとりはふせど、敷たへの、枕ならぶるあらましぞする。
とへかしな、情は人の身のためを、うき物とても心やはある。
言の葉の霜がれにしに思ひにき、露のなさけもかからましかば。
夜もすがら恨みを袖にたたふれば、枕に波の音ぞきこゆる。
ながらへて人のまことをみるべきに、戀に命のたえむものかは。
たのめおきしそのいひごとやあだになりし、波こえぬべき末の松山。
川のせによに消えぬべきうたかたの、命をなぞや君がたのむる。
かりそめにおく露とこそ思ひしか、秋にあひぬるわが袂かな。
おのづからありへばとこそ思ひつれ、頼みなくなるわが命かな。
身をもいとひ、人のつらさを歎かれて、思ひ數ある頃にもあるかな。
菅の根のながく物をば思はじと、手向けし神にいのりしものを。
うちとけてまどろまばやは、唐衣、よなよなかへすかひもあるべき。
わがつらきことをやなさん、おのづから、人めを思ふ心ありやと。

ことととへばもてはなれたる氣色かな、うららかなれや、人の心の。
物おもふ袖に歎きのたけみえて、忍ぶしらぬは涙なりけり。
草の葉にあらぬ袂に物おもへば、袖に露おく秋のゆふぐれ。
あふことのなき病にてこひしなば、さすがに人や哀とおもはん。
いかにぞや、いひやりたりし方もなく、物を思ひてすぐる頃かな。
我ばかり物おもふ人や又もあると、もろこしまでも尋ねてしがな。
君に我いかばかりなる契ありて、まなくも物を思ひそめけん。
さらぬだにもとの思ひのたえぬまに、歎きを人のそふるなりけり。
我のみぞわが心をばいとほしむ、あはれむ人のなきにつけても。
いつとなきおもひは富士の煙にて、おきふす床や浮島が原。
これもみな昔のことといひながら、など物おもふ契なりけん。
などか我つらき人ゆゑ物をおもふ、契をしもは結びおきけん。
紅にあらぬ袂のこき色は、こがれて物をおもふ涙か。

せきかねてさはとてながす瀧つせに、わく白玉は涙なりけり。
歎かじとつつみし頃は涙だに、うちまかせたる心ちやはせし。
今は我こひせん人をとぶらはん、世にうきことと思ひしられぬ。
おもへども思ふかひこそなかりけれ、思ひもしらぬ人をおもへば。
あやひねるさざめの小簑きぬにきん、涙の雨をしのぎがてらに。
なぞもかくこと新しく人のとふ、わが物思ひはふりにしものを。
しなばやな、何おもふらん、後の世も戀はよにうきこととこそきけ。
いとほしや、さらに心のをさなびて、たまきれらるる戀もするかな。
君したふ心のうちはちごめきて、涙もろにもなるわが身かな。
なつかしき君が心の色をいかで、露も散らさで袖につつまん。
いつか我塵つむ床を拂ひあけて、こんとたのめん人を待つべき。
よたけたつ袖にたぐへて忍ぶかな、袂の瀧におつるなみだを。
うきにより遂にくちぬるわが袖を、心づくしに何忍びけん。

ひとりきてわが身にまとふ唐衣、しを〳〵とこそなきぬらさるれ。
いひたててうらみはいかにつらからん、思へばうしや、人の心は。
歎かるる心のうちの苦しさを、人のしらばや、君にかたらん。
人しれぬ涙にむせぶ夕暮は、引きかつぎてぞうちふされける。
思ひきや、かかる戀路に入りそめて、よく方もなき歎きせんとは。
あやうさに人目ぞ常によかれける、岩のかどふむほきのかけ道。
しらざりき、身にあまりたる歎きして、ひまなく袖をしぼるべしとは。
吹く風に露もたまらぬ葛の葉の、うらがへれとは君をこそ思へ。
我からと藻にすむ蟲の名にしおへば、人をば更に恨みやはする。
空しくてやみぬべきかな、空蟬のこの身からにておもふ歎きは。
つつめども袖より外にこぼれ出て、うしろめたきは涙なりけり。
わが涙うたがはるべき心かな、故なく袖のしをるべきかは。
さることのあるべきかはと忍ばれて、心いつまでみさをなるらん。

とりのくし思ひもかけぬ露はらひ、あなくしたかのわが心かな。

君にそむ心の色の深きには、匂ひもさらにみえぬなりけり。

さもこそは人目思はずなりはてめ、あなさまにくの袖の氣色や。

いかさまに思ひつづけて恨みまし、一重につらき君ならなくに。

うらみてもなぐさめてまし、中々につらくて人の逢はぬと思はば。

この歌題も又人にかはりたることどももありけれど、かかず。この歌ども山里なる人の語るにしたがひてかきたるなり、さればひがごとどもや。むかし今のこと取りあつめたれば、時折ふしたがひたることども。

この集を見てかへしけるに。　院少納言局

まき毎に玉の聲せし玉章の、たぐひは又ちありけるものを。

かへし。

よしさらば光なくとも玉といひて、詞のちりは君みがかなん。

讃岐にまうでて、松山と申す所に、院おはしましけん御跡たづねけれども、

讃岐の松山は高松の西、丸亀の東北にあり。

かたもなかりければ。

松山の波のけしきは變らじを、かたなく君はなりましにけり。

雪のふりけるに。

松の下は雪ふる折の色なれや、みな白妙にみゆる山路に。

雪つみて木も分かず咲く花なれば、常磐の松も見えぬなりけり。

花とみる梢の雪に月さえて、たとへん方もなき心ちする。

まがふ色は梅とのみ見てすぎゆくに、雪の花には香ぞなかりける。

谷の庵に玉の簾をかけましや、すがるたるひの軒をとぢずば。

大師のうまれさせ給ひたる所とて、めぐりしまはして、そのしるしの松のたてりけるを見て。

あはれなり、おなじ野山に立てる木の、かかるしるしの契ありけり。

岩にせくあか井の水のわりなきは、心すめともやどる月かな。

又ある本に。

大師とは弘法大師のこと。

まんだらじの行道どころへ登るは、世の大事にて、手をたてたるやうなり。大師の御經かきて埋ませおはしましたる山の嶺なり。ばうのそとは一丈ばかりなる壇つきて立てられたり。それへ日毎に登らせおはしまして、行道しおはしましけると申し傳へたり。めぐり行道すべきやうに、壇も二重につき廻されたり。登る程のあやうさ、ことに大事なり。かまへてはひまはりつきて。

めぐりあはんことの契ぞ頼もしき、きびしき山の誓みるにも。

やがてそれが上は大師の御師にあひまゐらせさせおはしましたる嶺なり、わかはいしさとその山をば申すなり、その邊の人はわかいしとぞ申しならひたる、山もじをば捨てて申さず、又ふでの山ともなづけたり。遠くて見れば筆に似て、まろ〳〵と山の嶺のさきの尖りたるやうなるを、申しならはしたるなめり。行道所より、かまへてかきつきのぼりて、嶺にまゐりたれば、師にあはせおはしましたる所のしるしに、塔をたておはしましたりけり、塔の礎はかりなく大きなり、高野の大塔ばかりなりける塔の跡と見ゆ、苔はふかく埋みたれども、石大きにしてあらはに見ゆ。筆の山と申す名につきて。

ふでの山にかきのぼりても見つるかな、苔の下なる岩のけしきを。

善通寺の大師の御影には、そばにさしあけて、大師の御師かきぐせられたりき。大師の御手などもおはしましき。四の門の額少々われて、大方は違はずして侍りき。末にこそいかがなりけんずらんと、おぼつかなくおぼえ侍りしか。

備前國に小島と申す島に渡りたりけるに、あみと申す物をとる所は、おのおのわれ〳〵占めて、長き竿に袋をつけて、たて渡すなり、その竿の立てはじめを一の竿とぞ名づけたる、中に年高き海人のたてそむるなり。たつるとて申すなることば聞き侍りしこそ、涙こぼれて申すばかりなく覺えて、詠みける。

善通寺は多度津より二里東南にあり。然し昔の地圖では海岸になつてゐる。

日比澁川共に備前兒島の南西にあり。ここから讃州は海上僅に一里半。

眞鍋は水島群島の一。鹽飽の島は今鹽飽諸島の本島をいふ。

牛窓は備前邑久郡である。牛窓と前島の間を牛窓の瀬戸といふ。

たてそむるあみとる浦の初竿は、罪の中にもすぐれたるかな。

ひひしふるはと申す方へまかりて、四國の方へ渡らんとしけるに、風あしくて程へけり。澁川のうらたと申す所に、幼き者どものあまた物を拾ひけるを問ひければ、つみと申すもの拾ふなりと、申しけるを聞きて。

おりたちてうらたに拾ふあまの子は、つみより罪をならふなりけり。

まなべと申す島に、京より商人どもの下りて、やう〳〵のつみの物ども商ひて、又しはくの島に渡りて商はんずる由、申しけるを聞きて。

まなべよりしはくへ通ふ商人は、つみをかひにて渡るなりけり。

串にさしたる物をあきなひけるを、何ぞと問ひければ、蛤を干して侍るなりと、申しけるを聞きて。

同じくばかきをぞさしてほしもすべき、蛤よりは名も便あり。

牛窓のせとに海人のいで入りて、さだえと申すものをとりて、舟にいれいれしけるを見て。

さだえすむせとの岩つぼ求め出て、いそぎしあまの氣色なるかな。

沖なる岩につきて、海人どものあはびとりけるところにて。

岩の根にかたおもむきも浪うきて、あはびをかづくあまのむらきみ。

題しらず。

小鯛ひく網のうけ縄よりめぐり、うきしわざあるしほさきの浦。

霞しく波のはつ花をりかけて、櫻鯛つる沖のあまぶね。

あま人のいそしくかへるひじきものは、小にし、蛤、がうな、したたみ。

磯菜つまんと思ひはじむるわかふのり、みるめ、きはさひ、しき、こころぶと。

伊勢のたふし（苦志）と申す島には、小石の白のかぎり侍る濱にて、黑は一つもまじらず。むかひてすがしまと申すは、黑かぎり侍るなり。

すがしまやたふしの小石わけかへて、黑白まぜよ、浦の濱風。

さぎしまの小石の白を、高波の、たふしの島にうちよせてける。

あはせばや、さぎを烏と碁をうたば、たふし、すが島、くろしろの濱。

伊勢の二見の浦に、さるやうなる女の童どもの集りて、わざとのこととおほしく、蛤をとり集めけるを、いふかひなきあま人こそあらめ、うたてき事なりと申しければ、貝合せに京より人の申させ給ひたれば、えりつつとるなりと、申しけるに。

今ぞしる、二見の浦のはまぐりを、貝合せとておほふなりけり。

いしこへ渡りたりけるに、るかひと申す蛤に、あこやのむねと侍るなり、それをとりたる殼を高くつみおきたりけるを見て。

あこやとるるかひのからを積みおきて、寶の跡をみするなりけり。

二つありける鷹の、伊良湖わたりすると申しけるが、一つの鷹はとどまりて、木の末にかかりて侍りと、申しけるを聞きて。

すだか渡るいらこが崎を疑ひて、なほきにかへる山歸りかな。

はし鷹のすゑろかさてもふるさせて、すゑたる人のありがたの世や。

宇治川をくだりける舟の、かなつきと申す物をもて、鯉のくだるをつきけるをみて。

宇治川の早瀬おちまふれう舟の、かつきにちかふ鯉のむらまけ。

小ばえつどふ沼の入江の藻の下は、人つけおかぬふしにぞありける。

たねつくるつぼ井の水のひく末に、江鮒あつまる落合のはた。

しらなはに小鮎ひかれて下るせに、もちまふけたるこめのしき網。

みるもうきは鵜縄ににぐるいろくづを、のがらかさでもしたむもち網。

秋風に鱸つり舟はしるめり、うのひとはしの名殘したひて。

新宮より伊勢の方へまかりけるに、みきしまにふれのさたしける浦人の、

黒き髪は一筋もなかりけるをよびよせて。

年へたる浦のあま人ことはん、浪をかづきて幾代すぎにき。

黒髪はすぐるとみえし白波を、かづきはてたる身には知る海人。

小鳥どもの歌よみける中に。

聲せずと色こくなると思はまし、柳の芽はむひはのむら鳥。

新宮は紀伊熊野。

みおや川原は高野川のこと。

桃園の花にまがへるてりうその、群立つをりは散る心ちする。
並びゐて友をはなれぬこがらめの、ねぐらにたのむ椎の下枝。

月の夜、賀茂にまゐりてよみ侍りける。

月のすむみおや川原に霜さえて、千鳥とほだつ聲きこゆなり。

熊野へまゐりけるに、ななこしの嶺の月を見てよみける。

立ちのぼる月のあたりに雲きえて、光かさぬるななこしの嶺。

讃岐の國へまかりて、みのつと申す津に着きて、月のあかくて、ひひのても通はぬ程に、とほく見え渡りたりけるに、水鳥のひひのてにつきてとび渡りけるを。

しき渡す月の氷をうたがひて、ひひのてまはるあぢのむら鳥。

いかで我こころの雲に塵すべき、見るかひありて月を眺めん。

眺めをりて月の影にぞ夜をば見る、すむもすまぬもさなりけりとは。

雲はれて身に憂なき人のみぞ、さやかに月の影はみるべき。

さのみやは袂に影をやどすべき、よわし心に月ながめそ。

月にはぢてさしいでられぬ心かな、眺むる袖に影のやどれば。

心をばみる人毎にくるしめて、何かは月のとりどころなる。

露けさはうき身の袖のくせなるを、月みる咎におほせつるかな。

ながめ來て月いかばかり忍ばれん、このよし雲の外になりなば。

いつか我このよの空をへだたらん、哀々と月をおもひて。

露もありつかへすぐ〳〵も思ひ出て、ひとりぞみつる朝がほの花。

ひときれは都を捨てていづれども、めぐりて花を木曾の棧。

捨てたれど隱れてすまぬ人になれば、猶世にあるに似たるなりけり。

世の中を捨てて捨てえぬ心ちして、都はなれぬわが身なりけり。

捨てし折の心を更にあらためて、見る世の人に別れはてなん。

思へ心、人のあらばや世にもはぢん、さりとてやはといさむばかりぞ。

呉竹のふししけからぬ世なりせば、この君はとてさし出でなまし。

あしよしを思ひわくこそ苦しけれ、唯あらるればあられける身を。

ふかく入るは月ゆゑとしもなきものを、うきよ忍ばん、み吉野の山。

嵯峨野のみしよにもかはりて、あらぬやうになりて、人いなんとしたりけるを見て。

この里やさがのみかりの跡ならん、野山もはてはあせかはりけり。

大覺寺の金岡がたてたる石を見て。

庭の岩にめたつる人もなからまし、かどあるさまに立てしおかねば。

瀧のわたりの木立、あらぬことになりて、松ばかりなみたちたりけるを見て。

ながれみしきしの木立もあせはてて、松のみこそは昔なるらめ。

龍門にまゐるとて。

瀬をはやみ宮瀧川をわたりゆけば、心の底のすむここちする。

おもひ出て誰かはとめてわけもこん、いる山道の露のふかさを。

大覺寺は嵯峨にある。金岡は巨勢金岡のこと。瀧のわたりは大覺寺瀧の邊といふ。

龍門は吉野。

異竹の今いくよかはおきふして、庵の窓をあけおろすべき。

そのすぢに入りなば心なにしかも、人め思ひて世につつむらん。

綠なる松にかさなる白雪は、やなぎのきぬを山におほつる。

さかりならぬ木もなく花の咲きにけり、思へば雪を分くる山道。

波とみゆる雪を分けてぞこぎ渡る、木曾の棧、底も見えねば。

みなつるは澤の氷のかがみにて、千歳の影をもてやなすらん。

澤もとけず、摘めどかたみに止まらで、めにもたまらぬゐぐのくさぐさ。

君がすむ岸の岩より出る水の、たえぬ末をぞ人もくみける。

たしろみゆる池の堤のかさそへて、たたふる水や春の夜のため。

庭に流す清水の末をせきとめて、門田やしなふ頃にもあるかな。

秋の色は風ぞ野もせにしきわたす、時雨は音を袂にぞきく。

みちのくにに、平泉に向ひて、たわしのねと申す山の侍るに、異木は少きやうに、櫻のかぎり見えて、花のさきたるを見てよめる。

きもせず、たわしね山の櫻花、吉野の外にかかるべしとは。

奥になほ人見ぬ花のちらぬあれや、尋ねを入らん、山郭公。

つばなぬく北野の茅原あせゆけば、心すみれぞ生ひかはりける。

例ならぬ人の大事なりけるが、四月に梨の花の咲きたりけるを見て、梨の欲しきよしを願ひけるに、若しやと人に尋ねければ、枯れたる柏につつみたる梨をただ一つ遣はして、こればかりなど申したる返事に。

花の折かしはにつつむしなの梨は、一つなれどもありのみとみゆ。

讃岐の、位におはしましける折、みゆきのすずのろうを聞きてよみける。

ふりにける君がみゆきの鈴のろうは、いかなる世にもたえず聞えん。

日の入る鼓の如し。

波のうつ音をつづみにまがふれば、入日の影のうちてゆらるる。

題しらず。

山里の人もこずゑの松がうれに、哀にきるるほととぎすかな。

ならべける心はわれか、ほととぎす、君まち得たるよひの枕に。

筑紫に腹赤（ハラカ）と申す魚（イヲ）の釣をば、十月一日におろすなり、師走に引き上げて、京へは上せ侍り。その釣の繩はるかに遠く引き渡して、通る舟のその繩にあたりぬるをばかこちかかりて、かうけがましく申して、むつかしく侍るなり。その心をよめる。

はらかつる大わたさきのうけ繩に、心かけつつすぎんとぞ思ふ。

いせじまやいるるつきてすまうなみに、けこと覺ゆるいりとりのあま。

磯菜つみて波かけられて過ぎにける、鰐のすみける大磯のねを。

百首

花十首。

吉野山、花のちりにし木の下に、とめし心は我をまつらん。

吉野山、たかねの櫻ささそめば、かからんものか、花のうす雲。

人はみな吉野の山へ入りぬめり、都の花に我はとまらん。

尋ねいる人には見せじ、山櫻、我とを花にあはんとおもへば。

山櫻、さきぬと聞きて見にゆかん、人をあらそふ心とどめて。

山櫻、ほどなく見ゆる匂ひかな、さかりを人にまたれ〳〵て。

花の雪の庭につもるとにイ跡つけじ、かどなき宿といひちらさせて。

ながめつるあしたの雨の庭の面に、花の雪しく春の夕暮。

吉野山、麓の瀧にながす花や、嶺につもりし雪の下水。

根にかへる花をおくりて、吉野山、夏のさかひに入りて出でぬる。

郭公十首。

なかん聲や散りぬる花の名殘なる、やがてまたるる郭公かな。

春くれて聲に花さく郭公、尋ぬることもまつもかはらぬ。

きかで待つ人思ひしれ、時鳥、聞きても人はなほぞ待つめる。

所からききがたきかと、郭公、里をかへても待たんとぞおもふ。

初聲をききてのの後は、時鳥、待つも心のたのもしきかな。

五月雨の晴間たづねて、郭公、雲ゐにつたふ聲きこゆなり。

郭公、なべてきくには似ざりけり、ふかき山べの曉の聲。

時鳥、ふかき山べにすむかひは、梢につづく聲をきくなり。

夜の床をなきうかされん、時鳥、物おもふ袖をとひに來らば。

時鳥、月のかたぶく山の端に、いでつる聲の歸りいるかな。

月十首。

いせじまや、月の光のさびる浦は、明石には似ぬ影ぞすみける。

池水に底きよくすむ月影は、波に氷をしきわたすかな。

月を見て明石の浦をいづる舟は、波のよるとは思はざるらん。

はなれたるしらの濱の沖の石を、くだかであらふ月の白波。

思ひとけば千里の影も數ならず、いたらぬくまも月はあらせじ。

大かたの秋をば月につつませて、吹きほころばす風の音かな。

何ごとかこの世にへたる思ひ出を、とへかし、人に月を教へん。

思ひしるをよには隈なき影ならず、わが目にくもる月の光は。
うき世とも思ひ通さじ、おしかへし、月のすみける久方の空。
月のよや、友とをなりていづくにも、人しらざらん栖をしへよ。

雪十首。

しがらきの柚のおほちはとどめてよ、初雪ふりぬ、むその山人。
いそがずば雪にわが身や止められて、山べの里に春をまたまし。
哀しりて誰か分け來ん、山里の雪ふりうづむ庭の夕暮。
湊川、とまに雪ふくとも舟は、むやひつつこそ夜をあかしけれ。
筏師の浪のしづむと見えつるは、雪をつみつつくだすなりけり。
たまりをる梢の雪の春ならば、山里いかにもてなされまし。
大原はせれうを雪の道にあけて、よもには人も通はざりけり。
晴れやらで二村山にたつ雲は、比良の吹雪のなごりなりけり。
雪しのぐ庵のつまをさしそへて、跡とめて來ん人をとどめん。

くやしくも雪のみ山へ分け入らで、麓にのみも年を積みける。

戀十首。

ふるき妹が園にうゑたるから薺、誰なづさへとおほしたつらん。
紅のよそなる色は知られねば、ふくにこそまづ染めはじめけれ。
さまぐの歎きを身にはつみおきて、いつしめるべき思なるらん。
君をいかに細かにゆへる滋目ゆひ、立ちもはなれず並びつつ見ん。
戀すともみさをに人にいはればや、身に隨はぬ心やはある。
思ひ出でよ、みつの濱松、よそだつるしがのうら波たたむ袂を。
うとくなる人は心のかはるとも、我とは人に心おかれじ。
月をうしと眺めながらも思ふかな、その夜ばかりの影とやは見し。
我はただかへさでを着ん、さよ衣、きてねしことを思ひ出でつつ。
川風に千鳥鳴くらん、冬の夜はわが思にてあけけるものを。

述懷十首。

いざさらばさかり思ふも程もあらじ、はこやが嶺の春にむつれて。
山深く心はかねておくりてき、身こそうき世を出でやらねども。
月にいかで昔のことを語らせて、影にそひつつたちもはなれん。
うきよとし思はでも身の過ぎにける、月の影にもなづさはりつつ。
雲につきてうかれのみゆく心をば、山にかけてをとめんとぞ思ふ。
捨てて後はまぎれし方は覺えぬを、心のみをばよにあらせける。
ちりつかでゆがめる道を直くなして、ゆく〳〵人をよにつかんとや。
はとしまんと思ひもみえぬよにしあれば、末にさこそは大ぬさの空。
ふりにける心こそなほ哀なれ、及ばぬ身にも世をおもはする。
深き山は苦むす岩をたたみあげて、ふりにし方ををさめつるかな。

イにより て補ふ

無常十首。

はかなしな、千歳思ひし昔をも、夢の中にてすぎにけるには。
ささがにの絲につらぬく露の玉を、かけて飾れる世にこそありけれ。
うつつをもうつつと更に思はねば、夢をも夢と何かおもはん。
さらぬことも跡方なきを、わきてなど、露をあだにもいひも置きけん。
灯のかかげ力もなくなりて、とまる光をまつわが身かな。
水ひたる池にうるほふしたたりを、命にたのむいろくづやたれ。
汀ちかく引きよせらるる大網に、いくせのものの命こもれり。
うら〳〵としなんずるなと思ひとけば、心のやがてさぞと答ふる。
いひ捨てて後のゆくへを思ひはてば、さてさはいかに浦島の箱。
世の中になくなる人をきく度に、思ひは知るを、おろかなる身に。

神祇十首

神樂二首。

めづらしな、朝倉山の雲ゐより、したひいでたるあか星の影。
名殘いかにかへす〴〵もをしからん、その駒にたつ神樂舍人は。

賀茂二首。

みたらしに若菜すすぎて、宮人のまてにささげて御戸開くなり。
長月の力合せにかちにけり、わがかたをかをつよく頼みて。

男山二首。

けふの駒はみつのさそふをおひてこそ、かたきを埒にかけて通らめ。

放生會。

みこし長の聲さきだてて下ります、をとかしことまる神の宮人。

熊野二首。

み熊野の空しきことはあらじかし、むしたれいたの運ぶ歩みは。
あらたなる熊野詣のしるしをば、氷の垢離にうべきなりけり。

御裳濯二首。

初春をくまなくてらす影を見て、月にまづしる、みもすその岸。
みもすその岸の岩根によをこめて、かためたてたる宮柱かな。

釋教十首

きりきわうの夢の中に。三首

まどひてし心を誰も忘れつつ、ひかへらるなる事のうきかな。
ひき〳〵にわかうてつると思ひける、人の心やせはまくのきぬ。
末の世の人の心をみがくべき、玉をも塵にまぜてけるかな。

無量義經三首。

悟ひろきこの法をまづ說き置きて、二つなしとはいひ極めけり。
山櫻、つぼみはじむる花のえに、春をばこめてかすむなりけり。
身につきて燃ゆる思のきえましや、涼しき風のあふがざりせば。

千手經三首。

花までは身に似ざるべし、朽ち果てて枝もなき木の根をな枯らしそ。
誓ひありて願はん國へ行くべくば、西のことばにふさねたるかな。
さまゞ〳〵にたな心なる誓ひをば、なもの言葉にふさねたるかな。

又一首、この心を。

楊梅の春の匂ひはへんきちの功徳なり、しらんの秋の色は普賢菩薩のしんさうなり。

野邊の色も、春の匂ひも、おしなべて心そめたる悟にぞなる。

雜十首。

澤の面にふせたるたづの一聲に、おどろかされて千鳥なくなり。

ともになりて同じ港を出る舟の、ゆくへもしらずこぎ別れぬる。

瀧おつる吉野のおくの宮川の、昔をみけん跡したはばや。

わがそのの岡邊にたてる一つ松を、友とみつつ[も]老いにけるかな。

さま〴〵の哀ありつる山里を、人につたへて秋のくれ(ぬィ)ける。

山がつのすみぬとみゆるわたりかな、冬にあせゆくしづ原の里。

山里の心の夢にまどひをれば、吹きしらまかす風の音かな。

月をこそながめば心うかれ出でめ、闇なる空にただよふやなぞ。

波たかき蘆屋の沖をかへる舟の、ことなくて世をすぎんとぞ思ふ。

ささがにのいとよをかくて過ぎにける、人の人なる手にもかからで。

西行全集　終

昭和五年八月廿七日印刷
昭和五年十月廿五日發行

西行全集
〔定價二圓二十錢〕

著者　野口米次郎

發行人　東京市日本橋區通三春陽ビル內
今村隆

印刷人　東京市本郷區真砂町三十六番地
龜谷良一

發行所　東京市日本橋區通三丁目春陽ビル內
富士書房
電話日本橋五一番

發賣所　東京市日本橋區通三丁目八番地
春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八番
振替東京一六一七番

日東印刷株式會社印刷

◎富士書房增版書

長塚節著 鍼の如く（五版） 定價一圓二十錢 送料八錢

橋田東聲著 子規と節と左千夫（七版） 定價二圓七十錢 送料十二錢

太田水穗著 和歌讀本（六版） 定價一圓五十錢 送料十二錢

島崎藤村原著 山崎斌編 藤村田園讀本（上下各五版） 定價各一圓八十錢 送料各十二錢

◆俳句讀本 近刊 島田青峯著

603
44

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black